

中古語における認識動詞構文の諸相

—現代語と比較して—

辻本 桜介

1 考察対象

次に示す例では、(1)では「～を 名詞と 思ふ」「～を 名詞に 思ふ」という構文が用いられ、(2)では「～を 形容詞終止形と 思ふ」「～を 形容詞連用形 思ふ」という構文が用いられている¹。これらは、「～を」が後続する「～と」「～に」や形容詞の部分に対して主格に立っているように見える²。

(1)a. この宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづき歩けば、このおはします遣戸を隔てて、所得顔にみたり。 (源氏・浮舟・6-153)

b. 上はよろづのことにすぐれて絵を興あるものに思したり。 (源氏・絵合・2-376)

(2)a. 若くなつかしき御ありさまをうれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりはなかなかあはれに思さるとぞ。 (源氏・帚木・1-113)

b. 久しき御対面のとだえをめづらしく思して、御物語こまやかに聞こえたまふ。 (源氏・御法・4-500)

(1)(2)のように「～を 内容補充成分³ 思う」という形を取る構文は、一般に認識動詞構文⁴と呼ばれ、先行研究においては、現代語を対象として詳細に分析が行われてきた。そこでまず、現代語の用例によりながらその特徴を見たい。

(3)a. そのとおり、和美は、岡田を、理想の男と思っていた。

¹ 上代では、次のようにミ語法を用いる構文も類似する表現性を担うが、本稿では取り扱わない。今後の課題としたい。

(i) 忌み忍ぶる事に似る事をしなも(似事乎志奈母) 常に勞しみいかしみおもほしまさくと(勞弥重弥所念坐久止) 宣りたまふ。 (続日本紀宣命・第2詔)

² 小田(2015:374-375)は、「～を～と思ふ」「～を～に思ふ」という形についてこのような解釈が可能であることを示している。

³ 「思う」は心中に何らかの思念を抱く意を表す動詞であり、その思念の内容を表す成分(「～と」「～に」あるいは形容詞連用形)が必須成分として共起する。本稿では、このように「思う(思ふ)」の表す思念の内容を示し、「思う(思ふ)」に対する必須成分として共起する成分を内容補充成分と呼ぶ。

⁴ 益岡(1984)・阿部忍(1991, 2001)・阿部二郎(2002)・日本語記述文法研究会編(2009)など多くの研究で用いられる用語となっている。

(BCCWJ/西村京太郎『全席死定』)

- b. 苦しい思いをしながら走っていることを誇りに思いたい。

(BCCWJ/林敏之『楯円球の詩』)

- (4) a. 私は父を愚かしいと思った。 (BCCWJ/『別冊文藝春秋』第235号)

- b. あらためて採石場跡の暮しを有難く思った。

(BCCWJ/安部公房『方舟さくら丸』)

(3)(4)は、それぞれ中古語の(1)(2)とほぼ対応する構造を持っている。これらの文のヲ格成分は、後続成分である「～と」「～に」や形容詞連用形の部分に対し、意味的に見て主格に立つという解釈が可能であると直観される。すなわちヲ格成分は後続成分とネクサス的な意味関係(特にコピュラ的な主述関係)を結んでおり、ヲ格成分と後続成分とのひとかたまりは、次のように、名詞述語文かあるいは形容詞述語文の形に変えて引用節として文中に埋め込んでもほぼ同じ意味を表すもの感じられるだろう。

- (3)'a. 和美は、「岡田は、理想の男だ」と思っていた。

- b. 「苦しい思いをしながら走っていることは誇りだ」と思いたい。

- (4)'a. 私は「父は愚かしい」と思った。

- b. あらためて「採石場跡の暮しは有難い」と思った。

以上のように、(3)と(4)が意味的に近い構造を持つことと、(3)(4)と(3)'(4)とが意味的に近いことが認められる。先行研究では、現代語におけるこれらの構文が持つ意味的・統語的な相違点について分析が進められてきた。

一方、中古語においても(1)(2)のように認識動詞構文の例が存するものの、管見の限りではそれらを詳しく分析した研究は無い。現代語における研究成果が、そのまま日本語一般に通用するものと見なされているためだろうか。しかし、中古語の認識動詞構文の用例を観察すると、現代語と異なる点を持つと思しいものも見受けられる。例えば次のような例はどのように捉えるべきだろうか。

- (5) [大宮は]そこらところせかりし御勢ひのしづまりて、この君 [=夕霧] を頼もし人に思したる、常なき世なり。 (源氏・野分・3-268)

- (6) [道長の御嶽精進に]さべき僧ども、様々の人々、いと多く競い仕うまつる。君達多う、族広うおはしませば、「この程いかに」と恐しうおぼしつれど、いと平かに参り着かせ給ぬ。年頃の御本意はこれより外の事なくおぼしめさる。

⁵ この構文におけるヲ格成分と内容補充成分との関係はネクサス的であると言われることがある(藤田2000:110)。渡辺(1986)によればネクサスとはイエスベルセンが用い始めた概念であり、広く、意味的に主語と述語の関係が認められる構造を指すものである。本稿の考察対象である認識動詞構文は、ヲ格名成分と内容補充成分の間にコピュラの意味関係が認められることが指摘されており(Kuno1976:47, Tomoda1976-77:364-365, 郡1992:50, 林1981:37-38, 坪本2001, 阿部二郎2002, 金榮敏2004:63-64, 陸2007:116など)、例えば次のように動作を表す成分が内容補充成分となることはない。

(i) *お父さんはお兄さんを(自分の車を)運転したと思っている。

(陸2007:116の(3b)、下線筆者)

[人々は] これを又世の公事に思へり。 (栄花・八・上-249)

(5) (6)では、内容補充成分として「頼もし人に」や「公事に」という形が用いられているが⁶、現代語でこれにほぼ相当する形に置き換えると容認度が落ちるようである。

(7) ?大宮は夕霧を、頼れる人に思っていらっしやる。

(8) *人々は、これを公務に思った。

あるいは、語順についても注意される例が見られる。

(9) 帝は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。

(源氏・竹河・5-104)

(10) …都の内といへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人の中にて、いふせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくまに、来し方行く先悲しきこと多かり。 (源氏・玉鬘・3-102)

(9) (10)は、「～を 内容補充成分」という通常の認識動詞構文の語順と異なり、「内容補充成分 ～を」という語順になっているという解釈が可能であるように見える。先行研究⁷でもしばしば指摘されているとおり、現代語ではヲ格成分と内容補充成分の語順は固定しており、掻き交ぜを行うと容認度が落ちる。少なくとも、次の例では「内容補充成分 ～を」という語順の(11a) (11a)よりも「～を 内容補充成分」という語順の(12b) (12b)の方が自然であろう。

(11)a. ?帝は 滅多にないほど素晴らしいと この今宮を 思っていらっしやる。

b. 帝は この今宮を 滅多にないほど素晴らしいと 思っていらっしやる。

(12)a. ??わずらわしく 世の中を 思う。

b. 世の中を わずらわしく 思う。

現代語と相違する点として、このような、現代語には置き換えにくい中古語の例について考察することがまず必要である。また、現代語と中古語に相異点があるならば、現代語で起こる現象が中古語で起こらない可能性にも注意を払う必要があるだろう。

以上を踏まえ、中古語における(1) (2)のような認識動詞構文を、内容補充成分の形態的特徴によって次のように分類し、現代語と比較しながらそれぞれの型が持つ性格を概観したい。

(13) **名詞型** **ト型**：～を 名詞と 思ふ…(1a)

ニ型：～を 名詞に 思ふ…(1b)

形容詞型⁸ **終止形型**：～を 形容詞終止形と 思ふ…(2a)

連用形型：～を 形容詞連用形 思ふ…(2b)

⁶ (5) (6)に関して、『源氏物語大成』(第三冊、p. 867)及び『栄花物語の研究』(校異篇・上巻、p. 470)で確認したところ、特に注意される異文の存在は示されていない。

⁷ 語順の問題に関する先行研究については、5節の冒頭で言及する。

⁸ 「終止形型」「連用形型」という用語は吉村(1994)に倣う。ただし、吉村(1994)はヲ格成分の生起しないものも含めているので、本稿で扱う認識動詞構文とは異なる性格のものも含まれる可能性がある。

資料	名詞型		形容詞型	
	ト型	ニ型	終止形型	連用形型
竹取物語	0	0	1	2
伊勢物語	2	1	2	0
土佐日記	1	0	0	0
大和物語	1	1	4	1
平中物語	3	0	4	0
蜻蛉日記	0	0	11	2
落窪物語	3	2	17	10
枕草子	3	1	6	2
源氏物語	30	74	166	166
紫式部日記	1	1	1	1
和泉式部日記	1	0	4	1
栄花物語	13	71	18	93
堤中納言物語	1	0	2	4
夜の寢覚	6	4	24	22
浜松中納言物語	5	8	14	16
更級日記	2	1	0	2
狭衣物語	4	15	18	26
合計	76	179	292	348

図表1では、本稿で考察対象とする中古語の認識動詞構文の分布状況を示した。「思ふ」「おぼす」「おもほす」「おぼしめす」の4語をまとめて「思ふ」類⁹とし、(13)に示した名詞型（ト型・ニ型）¹⁰、形容詞型（終止形型・連用形型）について、それぞれ集計した。いずれの型も、一定数の用例を得ることができる。概ね¹¹、各資料の分量に応じてそれぞれの型の例が出ていると言えるだろう。このデータによりつつ、次節から詳しく分析を行う。

以下、本稿の構成は次の通りとする。まず2節では名詞型のうちト型について検討し、3節ではニ型について検討する。4節では、形容詞型について終止形型と連用形型とを比較しながら考察する。5節では、ヲ格成分と内容補充成分の語順の問題について触れる。6節はまとめである。

なお、論じていくに際し用例はやや多めに挙げることにしたい。前述のとおり、先行研究においては認識動詞構文が歴史的な観点から検討されることは殆ど無かった。注目

⁹ 「たまふ」などの敬語補助動詞の後接する例は採るが、「おぼしなげく」「おぼしはつ」「おぼしなる」などの複合動詞、及び複合動詞に係助詞・副助詞が割り込んだものと捉えられる「思ひ+係助詞/副助詞+動詞」という形の例は採らない。

¹⁰ 品詞的に多様なふるまいを持つ「あはれ」を用いた「～を あはれ {に/と} 思ふ」は今回の考察対象から除いた。「～を あはれ {に/と} 思ふ」に関しては、吉村(1987)において詳しく論じられている。

¹¹ 無論のことであるが、必ずしも諸資料が均質であるとは言い切れない。例えば、資料的規模の大きい『源氏物語』と『栄花物語』を見比べると、『源氏物語』では終止形型の例が一定量得られるのに対し『栄花物語』ではかなり例数が少ない。興味深い問題ではあるが、本稿では、こうした資料論的な問題には立ち入らないことにしたい。

されてこなかった実態を明らかにし、また、現代語における認識動詞構文の今後の研究にも資する内容を提示するためには、用例を多く示すことが必要であろうと思う。

2 ト型—断定の「なり」が挿入されないこと、及び「例外的格付与」という分析について

まずト型について考察する。中古語におけるト型の用例は、そのまま現代語のト型と置き換えて捉えて問題無いようである。

- (14) かう、帝もおはしまさず、むつましくおぼしめしし人をかたみと思ふべきに、かく世にうせかくれたまひにたれば、いとなむ悲しき。
(大和・一六八・407)
- (15) 年頃この家をめでたき所とおぼして、まづかかる折渡らせ給へる、おし返しあさましければ、「何して」といふ事のやうにつらくあさましうおぼさる。
(栄花・二十・下-139)
- (16) 御車寄せて、[姫君を] おろしたてまつりたまふを、[姫君は] いかであらぬ人 [=夫と異なる人] とは思さむ。
(堤中・464)
- (17) 尚侍の君、夜離れを何とも思されぬに、かく心ときめきたまへるを見も入れたまはねば、御返りなし。
(源氏・真木柱・3-367)
- (18) 「われをば宮の中将とや思ふらん」と、あはれに心ぐるしく思しやる。
(寝覚・一・67)

現代語でもト型は次のように用いられ、中古語の例と異なる点は見出しがたい。

- (19) その一匹が宮浦に吠えかかり、でっぷり太った飼い主は彼を不審者と思つらしく、社員証を見せるまで納得してくれなかった。
(BCCWJ/荒木源『骨ん中』)
- (20) ここのところは、私を外国人と思わず、私があくまでアフガン人の一人として話していると考えていただきたい。(BCCWJ/中村哲『医者井戸を掘る』)

中古語資料から得られる用例を見る限り、現代語と特に異なる点はないように見える。しかし、現代語における先行研究でト型に関する議論を参照すると、考えるべき問題点が1つ浮かび上がる。

現代語のト型に関連する先行研究では、従来、断定の助動詞ダを挿入した「～を 名詞だと 思う」の形が標準的な表現として用いられるものとされ¹²、ダが無いト型とど

¹² 例えば嶺岸(2007)は、「～と思う」のような引用表現について、「引用節が名詞や形容動詞[中略]で終わっている場合には通常、節の終わりにダを置く。しかし、この本来置かれるべきダが省略された引用節が、徐々に目立ってきている」(p.1)とし、現代語においてト型は新しい言い回しとして現れていると見ている。嶺岸(2007)では、ダが無い「名詞と 思う」という言い方について、「引用節の終わりにおいて、「だ」が置かれるべきであるのに省略されている」(p.2)とか「引用節の最後は、[中略]本来はその直後に「だ」が要求される」(p.2)というように、「ダの省略された非本来的な表現である」

のような関係を持つかが論じられてきた。そこで本研究でも、現代語の「～を 名詞だと 思う」に対応する中古語の表現として、断定を表すとされるナリ¹³が入る「～を 名詞句なりと 思ふ」の例が見出せるという予想を立てて調査を行ったが、確例は見出しがたい¹⁴。すなわち、中古語ではト型にナリを割り込ませる言い方は標準的ではないのに対し、現代語ではダを割り込ませる言い方が標準的に用いられるという相違点が指摘できることになる¹⁵。

現代語の例を観察する限り、ダが有るか無いかという形式的な相違がはっきりしていても、文の意味が大きく変わるようには感じられない。先行研究においても、ダの有無がどのような意味的相違をもたらすかについては、必ずしも明示的な結論に至っていない。

ということが頻りに述べられ、強調されている。このような、「名詞だと 思う」からダが何らかの要因で省略されたのがト型だという見方は、新村(2007:172)、友田(1978, 1994)、三枝(2001:7)などにも見られる。中阜(1997:85)は、ダを挿入できないタイプの「名詞と」が存在することを指摘しているが、本稿で問題とするような「～と思ふ」に関して詳しくは言及していない。

¹³ 現代語のダとの通時的繋がりはないが、終助詞のゾも断定表現に用いられるため、「～を 名詞句ぞと 思ふ」という形の例があるかも調査したが見出されなかった。

¹⁴ 本稿の調査範囲では、存疑例として次の2例が見出されるのみである。『源氏物語大成』(第二冊・p. 620)によれば、(i)の「なり」は「なりけり」(御物本・保坂本)「なりける」(河内本系・陽明家本)などの異文がある。(ii)の「を」は活用語に接続しており、接続助詞と見なすべきかもしれない。

(i) 心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍びこめられたりけるをなむ、かへりてうしろめたき心なりと思ひぬる。(源氏・薄雲・2-452)

(ii) 御物の怪にて、時々なやませたまふこともありつれど、いとかくうちはへをやみなきさまにはおはしまさざりつるを、この度はなほ限りなりと思しめしたり。

(源氏・若菜上・4-21)

¹⁵ 田野村(2008)は、国会会議録を資料として1940年代から2000年代にかけての「～{だ/である/φ}と思う」の使用状況を調査し、「だ」「である」を用いる傾向は時間の経過とともに高まっていることを指摘しており、小田(2015:528)は、中古語においては引用の「と」の直前にはナリ(断定の助動詞または形容動詞の活用語尾)が現れにくいことを指摘している。ヲ格成分を取る認識動詞構文に限定した指摘ではないが、ダの挿入が歴史的に見て後発的な現象であることを示唆するものである。ただし、ヲ格成分を取らない引用構文であれば、次のようにナリを「と」で受けることもある(ただし用例数が多いとは言えない)。

(i) …、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、まして

これはいとう言ひなしつべきたよりなりと思すに、いと名立たしう、(源氏・葵・2-36)

(ii) いとかおはするけぞかし、よきやうといひながら、あまり心もたなく後れたる、頼もしげなきわざなり、と思すに、世の中なべてうしろめたく、…(源氏・若菜下・4-260)

(iii) かしこまり、うれしく、めでたき女がたなりと思ひて、「かうかうなむのたまふ」など、まかでて語る。(落窪・四・301)

(iv) よろづつれづれる人の、まぎることなきままに、古き反古ひきさがし、行ひがちに、口ひひらかし、数珠の音高きなど、いと心づきなく見ゆるわざなりと思ひたまへて、心にまかせつべきことをさへ、ただわがつかふ人の目にはばかり、心につつむ。(紫・205)

(v) …きこしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに心ぼそくてあらむよりは」と召すを、古代の親は、宮仕人はいと憂きことなりと思ひて過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもころもよ」といふ人々ありて、しづしづに、出だしたてらる。(更級・325)

(vi) つねに仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫のかたはらに寄るべくだにあらざりけり。異人よりはけうらなりと思しける人も、かれに思し合すれば、人にもあらず。(竹取・63)

友田(1994)では、次の(21)を非文かまたは容認度の落ちるものと判定しているが、筆者は不適格な表現とまでは言えないように感じる。

- (21)a. 浩は恵子を二部の学生と思っている。
- b. 太郎は二郎を弁護士と思っている。

(友田 1994:39 の(13b) (14b)、下線筆者)

- (22)a. 浩は恵子を二部の学生だと思っている。
- b. 太郎は二郎を弁護士だと思っている。

(友田 1994:39 の(13a) (14a)、下線筆者)

ダを挿入した(22)の方が自然であると判定する話者が多い可能性は否定できないが、(21)は容認できないほどに不自然な表現なのだろうか。

友田(1994)は、(21)を不適格と判定した上で、不適格となる要因としてトの受ける名詞句が「主観の入り込む余地はない」ものであることを挙げている。ならば、例えば次の(23)の「人間だ」「子どもだ」は特に「主観」の入った語句でないと思われるが、それに対して(24)の「人間と」「子供と」には「主観」が入っている、ということになるのだろうか。「主観」の指すところが不明瞭であり、再考の余地が残るものと思われる。

- (23)a. お前は自分のことを無力な人間だと思っている。

(BCCWJ/中川健一『日本人に贈る聖書ものがたり』)

- b. 六年生を子どもだと思ひ、子ども扱いをしていますと大きな誤りを犯しかねません。

(BCCWJ/田崎仁『中学生の自宅学習法』)

- (24)a. 私は自分のことを非常時型の人間と思っている。

(BCCWJ/船井幸雄『この一粒の「知恵の種」』)

- b. わしを子供と思っておるのだな。

(BCCWJ/藤沢周平『漆の実のみのる国』)

現代語と中古語の間に見られる、ダが入る形を取りうるか否かという表層的な相違点は、何らかの文法的な相違とも連関するのだろうか。もし現代語においてダの有無によって何らかの事柄を表し分けが行われているのだとすれば、中古語はそうした表し分けのできない、未分化なシステムだということになる。中古から現代への変化過程については今後の課題であるが¹⁶、ダを挿入する表現の獲得という歴史上の変化が何を意味す

¹⁶ 中世末頃の資料には、数量的には多くないようであるが、現代語の「～を 名詞だ と 思う」に繋がる次のような例が見出せる。

(i) カウスルハ罪トモ人ガ思ハ不シテ習ツケテハヤスクナルホドニ是ヲ法^{ヘウ}ヂヤトロモヘリ

(六物図抄・44)

(ii) …パストルもこれを「究竟の砌ぢゃ」と思ひ、言葉ではそでもない所を教へ、…

(エソボのハプラス・117)

(iii) あれがはらはを、女じゃと思ふて申と見えた、何なりともいたさう

(大蔵虎明本狂言集・れんじゃく・中-249)

るかを考察することは必要である。以下、本節では現代語におけるト型の認識動詞構文に関して分析を行うことによって、「なり」の挿入が起こらない中古語のト型が、現代語から見てどのような文法的性格を持つと言えるかについて考えたい。

2. 1 「～と」内部の時制

阿部二郎(2001)は、次の例を挙げて「～を 名詞 だと思ふ」の「名詞だ」とは時制節であり、「～を 名詞と 思ふ」の「名詞と」は非時制節であるとしている。

(25)a. 太郎は花子がかつて女優だったと思っている (らしい)。

b. *太郎は花子がかつて女優だと思っている (らしい)。

c. *太郎は花子がかつて女優と思っている (らしい)。

(以上、阿部二郎 2001:19 の(23) (24) (25))

d. 太郎は花子を女優と思っている。

(25a)は副詞「かつて」が「女優だった」と呼応しているが、(25b)は「かつて」と呼応しない「女優だ」となっているために不適格である。一方、(25d)に関して、もし「女優と」の部分に音形を持たない時制辞φの存在を想定できるならば、「かつて」が共起してもその時制辞φが呼応するので適格になることが予想される。しかし実際には(25c)は不適格であり、(25d)の「女優と」には「かつて」と呼応できる時制形態が存在しないものと考えられることになる。

ただしこのうち、(25a)の適格性については話者によって判断が別れるという点に注意が必要である。Kuno(1976)は、次のように過去時制の形式が用いられる形は marginal であると指摘している。

(26) ヤマダは自分を愚かな男だったと思った。

(Kuno1976:41 の(89)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

Oshima(1979)も、次の例について「だった」の方を非文と判定している。

(27) メアリーはジョンを病氣 {だ/だった} と思っている。

(Oshima1979:437 の(95)、原文を仮名・漢字表記に改めた)

林(1981)も、「思い込む」を述語とする場合についてであるが、同様の次の例を不適格としている。

(28) ハナコはタロウを早起きだったと思い込んでいる。

(林 1981:39 の(9b)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

Ohashi(1984)も、「信じる」を述語とする場合についてであるが、やはり同様の形の次の例を不適格と判定している。

(29) メアリーはジョンを UCLA の学生だったと信じている。

(Ohashi1984:80 の(11a)に相当、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

Ueda(1988)も、次の例を非文と判定している。

- (30) a. ジョンはビルを馬鹿だったと思った。
b. ジョンはその本を面白かったと思った。

(以上、Ueda1988:43の(22b)(23b)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した) Ohtani (1998)も、次の例の文法的適格性は低いとしている。

- (31) ケンはナオミを馬鹿だったと思った。

(Ohtani1998:112の(14a)、原文を仮名・漢字表記に改めた) Kuno(1976)、Oshima(1979)、林(1981)、Ohashi(1984)、Ueda(1988)、Ohtani(1998)による判定は、標準的な日本語においては「～を 名詞だと 思う」における「名詞だ」はテンスの分化しない非時制節である可能性を示唆するものであり、注目される¹⁷。ただ筆者の内省では、(25a)(26)(27)(30)(31)のような「～を 名詞だったと 思う」はやや使いにくいかという印象があるという程度であり、不適格とまでは言えない。次のような例が出ることから、稀には「～を 名詞だったと 思う」という言い方が用いられることがあると言えよう。

- (32) 思いがけない石油を流したような光彩が、一面に浮いているのだ。お前はそれを何だったと思う。それは何万匹とも数の知れない、薄羽かげろうの屍体だったのだ。
(梶井基次郎『檸檬』)

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を用いて、「～を 名詞だと 思う」「～を 名

図表2	書籍	雑誌	新聞	合計
～を 名詞だと 思う	55	3	0	58
～を 名詞と 思う	28	2	1	31
～を 名詞だったと 思う	0	0	0	0

詞と 思う」「～を 名詞だったと 思う」という表現の使用実態を調査したところ、図表2に示す結果が得られた¹⁸。標準的な日本語が用いられる書籍・新聞・雑誌を対象とした簡単な調査であるが、「～を 名詞だと 思う」「～を 名詞と 思う」の実例一定量得られるのに対し、「～を 名詞だったと 思う」の例は得られない。

ここで、次のような表現に注意したい。

¹⁷ Horn(2012)も(26)の例を引いて「座りの悪い文」としつつ、次のようにヲ格成分の表す事物が時間的に限られている場合には「容認度が非常に高くなる」としている。

(i) ジョンはその時の自分の行動をあまりにも軽率だったと思っている。

(Horn2012:233の(14))

Horn(2012)の主張が正しいかどうか、微妙な内省判断によるところが大きいだろう。(25a)～(31)や(i)のような作例の文法性がどうあれ、本稿では、ほぼ実用されない形であることに注目したい。

¹⁸ コーパス検索アプリケーション「中納言」により、サブコーパス「出版」(書籍・新聞・雑誌)の非コアデータを対象として次の共起条件を指定して検索を行った。

- ・「～を 名詞と 思う」
語形一「ヲ」、品詞一大分類一名詞、語形一「ト」、語彙素「思う」
- ・「～を 名詞だと 思う」
語形一「ヲ」、品詞一大分類一名詞、語形一ダ、語形一「ト」、語彙素「思う」
- ・「～を 名詞だったと 思う」
語形一「ヲ」、品詞一大分類一名詞、語形一ダ、語形一「タ」、語形一「ト」、語彙素「思う」

- (33) しかし太郎は、ほんの少しだけ、気分がよかった。それは、ちょっと説明するのがむずかしい程のささやかなことなのだが、母が、今、この時にあたって、決して藤原家のことを話題にしないことを「たすかった」と思ったのだった。
(曾野綾子『太郎物語』)

認識動詞構文は、ヲ格成分と内容補充成分の間に、コンピュータ的な意味関係が存在するとされるが¹⁹、この例において、内容補充成分に相当する位置に現れた「たすかった」は、語彙の意味としては通常は動的事態を表す語句であり、名詞述語や形容詞述語のように状態を表すわけではない。そのため、ヲ格成分「～話題にしないことを」との間にコンピュータ的な関係を持つものとは一見認めにくいだろう。しかし、「助かった」は、“太郎にとって助けとなる出来事”に相当する意味で解釈することも不可能ではなく、コンピュータ的な関係を完全に否定することはできない。このような表現の容認度も話者により異なるかもしれないが、実例が存することは注意してよいだろう。このことに着目すると、認識動詞構文においては、ヲ格成分と内容補充成分の間にコンピュータ的な関係という意味論的条件が満たされていることが第一に必要であり、内容補充成分が（付属語を伴わない終止形の）形容詞述語や名詞述語の形を取るという形態論的な制約はさほど強くないということになる。(25a) (26) (27) (30) (31) も、内容補充成分に関わる形態論的な制約が緩やかであるために、タ形を取ることが許容され、その結果として「かつて」などの副詞成分が内容補充成分を修飾することにもなってくる、と見るのができないだろうか。

現代語においては、「～を 名詞だと 思う」のように断定の助動詞ダが入り込む形が標準的な表現として用いられるようになり、時制節として用いることもできるようになってきているようであるが、実用されることはほぼ無い。中古語のナリも、次のように「なりき」の形で過去時制を表すため、時制辞と見ることができ点では現代語のダと共通する性格を持つと言えるだろう。しかし、現代語においてト型に挿入されたダが時制辞としての機能を発揮しないらしい点を考慮すれば、ナリ・ダの時制辞としての性格に注目して、ト型において時制辞の挿入が起きない中古語から、時制辞の挿入が起こる現代語へ変化した(時制節としても働くようになった)と考えるのは妥当でないだろう。

- (34) ここに、古のことも、歌の心をも知れる人、わづかに一人二人なりき。

(古今・仮名序・25)

したがって、通時的観点からは、時制節としての機能を獲得する必要性があつてダの挿入が許容されるようになった、というようなことではなく、別の何らかの要因によってダの挿入が許容されるようになり、結果的に、ダの時制辞としての性格が稀に発揮されて時制節としても用いられるようになってきている、と説明すべきではなかろうか。次

¹⁹ 注5を参照。

項では、歴史的に見てダの挿入が起こるようになることの、“別の何らかの要因”についていささか考察を加えたい。

2. 2 解釈の曖昧性—トートロジー的表現に着目して

友田(1978)は、ダの挿入に関して注目すべき指摘を行っている。すなわち、次の例のうち(35b)(36b)はダがあるために非文となるのだという。

(35)a. ジョンは親を親とっていない。

b. ジョンは親を親だと思っていない。 (友田 1978:72 の(16b)(16a))

(36)a. ジョンはメアリーを女とっていない。

b. ジョンはメアリーを女だと思っていない。 (友田 1978:72 の(17b)(17a))

事実上、(35)で「親」が「親」であることは自明であり、(36)で「メアリー」が「女」であることは自明である。こうした2つの語句を連ねて用いるのはトートロジー的な表現であると言えるだろう。友田(1978)によれば、(35a)(36a)の内容補充成分に用いられる名詞「親」「女」は、「特殊な含み」を持つという。そして、こうした「特殊な含み」を持つ認識動詞構文においては、ダの削除が義務的になるのだと説明している。歴史的な観点からは、ダが入る形は後発的なものであるから、本来あるべきダが義務的に削除されるというよりも、ダの挿入が基本的に可能となった現代語²⁰においてダの挿入が許容されない場合があると考えるべきである。まず、ここで言われる「特殊な含み」について考えたい。

(37) 最近の自殺者の多発は、こうした政府並びに国鉄当局の人を人とも思わない合理化の推進の犠牲とも言えるのではないのでしょうか。

(国会会議録・第107回・参議院本会議)

(38) 暗い部屋の隅の方に影のように動く小な動物の敏捷さ、人を人とも思わず、長い尻尾を振りながら、出たり入ったりするその有様は、憎らしくもあり、おかしくもあり、「き、き」と鳴く声はこの古い壁の内に秋の夜の寂寥を添えるのであった。 (島崎藤村『破戒』)

前後文脈に照らして解釈すると、(37)の「人と思わない」は、「人間らしい権利と尊厳を持つ存在としての人と思わない」のような意味を表し、(38)の「人と思わない」は、「小動物の警戒すべき存在としての人と思わない」のような意味を表すと見るべきであろう。すなわち、友田(1978)のいう「特殊な含み」は、同じ名詞句でも文脈によって異なる

²⁰ 金賢娥(2012)は、「犯人を僕と思う」を不適格とし、「犯人を僕だと思う」を適格としている。しかし、金賢娥(2012)の聞き取り調査では、後者についても完全に自然とは言えないとする話者がいたという。筆者の感覚でも、完全に許容されるとは言いがたい。ダの挿入によって容認度が多少上がるにしても、そもそも十分に自然な表現にならないならば、ダの挿入が義務的であるか否かを論ずる以前の問題だろう。

ってくるような、語用論的な意味合いとして了解される。このような、語用論的な意味を持つことが文脈上必要な場合、ダを挿入した(35b)(36b)を用いるのは適切でない²¹。そして、こうした語用論的な意味は、(35a)のように、ヲ格成分とトの受ける名詞句とが同語反復になっていたり、(36a)のように、トの受ける名詞句の表す事物が、事実上はヲ格成分の表す事物が持つ属性として自明である場合といった、トートロジー的な表現に限られるのではないかと思われる(この点についての詳しい検討は別の機会に行いたい)。なお、(35)～(38)の主節述語「思っていない」「思わず」「思わない」は否定形だが、肯定形の場合については同種の「特殊な含み」が現れるわけではないようである²²。今後の課題としたい。

ところで、(35b)(36b)は非文法的な表現とも言いきれないのではなかろうか。次の例のように、「思う」の主体が、何らかの事情によって、ある事物をその事物以外の事物とみなしてしまうという文脈であれば、ダを用いる表現も十分許容されるだろう。

(39) 幻覚に捕らわれた今の太郎は、人を人だと思っていない。

(40) 事故で記憶喪失となったジョンは、親を親だと思っていない。

(41) メアリーは男勝りで、見た目も男そのものである。そのため太郎は、メアリーを女だと思っていない。

すなわち、ダを挿入すると「特殊な含み」が消え、「だ」との受ける名詞句の表す語彙の意味による解釈が優先されるようになる。ただし、このような文脈に置いたとしても、ダを挿入することは義務的ではない、という点に注意しなければならない。すなわちト型においてもトの受ける名詞句を「特殊な含み」を持つものと解釈せず、その語彙的意

²¹ ダが挿入できない他のボタンとして、金城(2012)は、次の例を挙げている。すなわち、「ことと存じます」がコロケーションとなっているために引用句「～と」の内部末尾にダを挿入がすることはできないのだという。

(i) a. 拝啓 時下ますます御健勝のことと存じます。 (金城 2012:30 の (9a))

b. *拝啓 時下ますます御健勝のことだと存じます。

²² 肯定文「XをXと思う」における2つの名詞句Xの間には、同語反復コンピュータ文「XはXだ」の持つ特徴が見て取れるようである。同語反復表現については先行研究も少なからずあり、本稿で詳しく議論する準備は無いが、例えば森山卓郎(1989)は、次の(i)は「王選手は王選手であり、ほかの人間(自分)とは違う」という意味で捉えることができ、「指示の同一性のみを主張し、結果的に他の関与を否定する」表現としての解釈があることを述べている。

(i) 王選手は王選手だ。 (森山卓郎 1989:2)

次の(ii)(iii)も、「恥は恥以外のものではない、と思っている」「安全は安全以外のものではない、と思ふな」という意味で解釈されよう。主節述語の肯否以外にも、同語反復的な認識動詞構文の意味解釈に関わる何らかの因子が存在することは否定できない。

(ii) 幸か不幸か日本は依然として体面を気遣う国と信じられている。[中略]が、いまやそれは虚像に近くなりつつある。恥を恥と思っているのは、日々やっていけないのかもしれない。

(毎日新聞・94/3/27 朝刊)

(iii) 安全を安全と思ふな再確認、事故防止これでもいいのか再点検、運営管理の事故防止、注意の上にも再注意、運営管理これでもいいのか事故防止などありまして、安全第一、誠実というのがありました。 (国会会議録・第166回・参議院決算委員会)

味で解釈することは可能である。次の例は(39)～(41)と同じ意味で解しても問題ない。

(42) 幻覚に捕らわれた今の太郎は、人を人と思っていない。

(43) 事故で記憶喪失となったジョンは、親を親と思っていない。

(44) メアリーは男勝りで、見た目も男そのものである。そのため太郎は、メアリーを女と思っていない。

以上に見たように、ト型の認識動詞構文は、ヲ格成分の表す事物とトの受ける名詞句とがトートロジカルな関係にある場合、トに前節する名詞句をその語彙の意味の通りに解釈すべき場合と、「特殊な含み」を持つものとして解釈すべき場合という、2通りの解釈があり曖昧性を生じている。これに対し、ダを挿入した「～を 名詞だと 思う」は、「だと」に前節する名詞句はその語彙の意味で解釈され、「特殊な含み」を持たない。ダの挿入は、複数の解釈が許されるという曖昧性を取り除く機能を持つと考えられる。

中古語においては現代語のようなダの挿入に相当する現象が存在しないため、以上に述べたような曖昧性を形式的な手段によって回避することは不可能だった。従って、次の(45)を見ても、「人と」の表す意味は、生物としてのヒトという語彙の意味の通りに解釈すれば良いのか、それとも文脈から何らかの「特殊な含み」を持つものと解すべきかはっきりしない。仮に、語彙の意味の通りに解釈することを優先させたい思いが書き手(紫式部)の中にあっただとしても、現代語におけるダの挿入に相当するような、形式的な手段によってそれを行うことはできなかったわけである。

(45) …、人を人とも思はず、…

(紫・209)

結局、次のように前後文脈を参照することによってしか、「人と」の意味を取ることはできないのである。(45)の前後を示した(46)から考えて、「人と」の「人」が意味するところはおおよそ「(物語や歌などに関する)最低限の素養を持つ、対等な相手」のようなものであることが知られよう。

(46) いと艶に恥づかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見おとさむものとなむ、みな人々いひ思ひつづくみしを、…

(同)

ダの挿入という形式的な手段によって、文の表す意味を明確にできるようになったことは、一つの形式で複数の意味を表しうるところから複数の形式で意味を明確に表す方式に変化するという、文法史的分析的傾向の上に乗せてとらえることができよう。本項で示したことは、2. 1の最後に述べた“別の何らかの要因”の一つに数えて良いと思われる。

2. 3 「例外的格付与」に関して

次に、ダの挿入に相当する現象が見られない中古語の状況について、2. 1と2. 2

で述べたこととは別の角度から考察したい。

認識動詞構文は、例外的格付与構文 (Exceptional case marking construction) と呼ばれることがある。生成文法における呼称であり、述語形態の成分に対して主格に立つ成分は「～は／が」などの形で現れるのが普通であるのに対し、「～と思う」が受ける述語形態の成分に対しては、主格に相当するはずの成分が「～は／が」などの形ではなく、主節の「思う」から格付与を受けて「～を」という形で現れうるという現象を、「例外的」な格付与と見なす考えから来るものである。本項では、生成文法における例外的格付与構文の位置付けや分析に深く踏み入ることはしないが、中古語におけるト型の認識動詞構文においてはダの挿入にあたる現象（「なり」の挿入）が起こらないことに留意し、例外的格付与という見方について考察したい。

現代語では、2. 2で観察したようなトトロジー的表現の場合を除けば、「～を 名詞だと 思う」のようにダを挿入するのが一般的になっている。2. 1で示した図表2からも分かる通り、ダを挿入する形の方が使用頻度は高い。しかし、中古語においては「～を 名詞なりと 思ふ」のような形は用いられず、トの受ける名詞が述語形態を取ることには一般的でなかった。すなわち、ダの挿入が可能となるのは歴史的に見て後発的な現象ということになる（ダという形式が生じるのが後世のことであるから、それは当然のことではあるが、「なり」の挿入というような類似した現象が起こらなかった点は現代語と中古語の相違と見て良いだろう）。現代語の「～を 名詞だと 思う」という形において、「名詞だ」は一見すれば述語形態を取っているように見えるが、対応する中古語の表現が「なり」を伴わない名詞単独の形態であるという事実は、現代語の「～を 名詞だと 思う」における「名詞だ」の部分が、通常の文末同様の述語相当の性格を持っているかどうかを疑うに十分な事実ではないだろうか。2. 1で見たように、述語形態によって一つの節としての資格を持つように見えてとしても、過去形にすると不適格になると見なす話者がいるのは事実であり、少なくとも、実用されることは殆どない。テンスは述語部分における重要な文法カテゴリーであり、述語的であることを示す一つの要素と見るならば、やはり「～を 名詞だと 思う」における「名詞だ」は述語としての性格を一部欠くことになる²³。

同様の観点では、述語部分の文法カテゴリーの一つであるモダリティが現れるかどうかにも疑問がある。まず森山卓郎(1988)は、認識動詞構文の「～と」について「終助詞が分化するような直接的引用はできず」と述べ、次に示す(47)を不自然なものと判定している。

(47) 彼 (の こと) を「馬鹿だなあ」と思う。 (森山卓郎 1988:84、下線筆者)
これに対し藤田(2000:193)は、(47)を「特に不自然とは思えない」とし、「森山の断定は

²³ 認識動詞構文における内容補充成分は、通常、動作を表す動詞述語が現れないので、アスペクトやヴォイスといった他の主要な文法カテゴリーとは関係が薄い。

当たらないと考える」としている²⁴。これも、過去時制を取れるか取れないかで話者の判断が異なるのと同次元で捉えられるのではないだろうか。2. 1で「～を 名詞だったと 思う」という形を容認するか否かが論者によって異なっていたのと同様に、モダリティが現れるか否かについても、他の論者の間で判断は割れている。順に見ていこう。

まず Tomoda(1976-77)は、次のように「かもしれない」「にちがいない」が現れる例を不適格なものとして掲出している (Minami Hatsumi という人の指摘であるとされるが、Tomoda もその判断を認めているということだろう)。

(48)a. ノブコはユキオを犯人かもしれないと思った。

(Tomoda1976-77:369 の(40)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

b. ケイコはスミオを大学生に違いないと思った。

(Tomoda1976-77:370 の(41)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

Ohashi(1984)においても、次のように「にちがいない」が現れる文は不自然なものとしてされている。

(49) メアリーはジョンを UCLA の学生ににちがいないと信じている。

(Ohashi1984:80 の(12a)に相当、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

これに対し、Kuno(1976)は、「だろう」「にちがいない」「かもしれない」「であるはずがない」などのモダリティ的意味を担う形式の生起は許されるものとしている (次の例では「推定する」を述語とする文も含まれるが、Kuno1976 では「思う」と同列に扱われている)。

(50)a. ヤマダはタナカを犯人だろうと推定した。

(Kuno1976:41 の(88a)、下線筆者)

b. ヤマダはタナカを馬鹿ににちがいないと思った。

(Kuno1976:41 の(91a)、下線筆者)

終助詞の生起については森山卓郎(1988)と藤田(2000)とで判断が異なり、助動詞の生起については Tomoda(1976-1977)・Ohashi(1984)と Kuno(1976)とで判断が異なっている。許容する話者が居るにしても、「～を 名詞だと 思う」において、トの前接要素である「名詞だ」はテンスの意味も、モダリティの意味も持たないと見て良いのではないだろうか。とすれば、ダが名詞に述語としての資格を与えていると見ることが難しくなるのではないか。「～を 名詞だと 思う」の「名詞だ」は、形態的には名詞述語相当に見えるが、ここに含まれるダは、統語的に述語としての機能を添える性格はかなり希薄なものと言える。ダは、2. 2で見たように、語用論的に生じる「特殊な含み」を持つものとしての解釈を回避する、といった意味的な機能を添える働きを持つようではあるが、

²⁴ 実例も見出されるが、多くはない。

(i) 家族を「いいなあ」と思えることでは、僕もあと一人を残すだけです。

(BCCWJ/北澤康吉・北澤美咲子『素敵だよ、登校拒否』)

述語相当の資格を与えるというような統語的機能はかなり希薄なのではないだろうか。

ちなみに金賢娥(2012)は、「(36a) [筆者注: 次の(51a)] には「すごく」が挿入可能であるのに対し、(36b) [筆者注: 次の(51b)] にはそれが不可能」と述べ、その観察結果を根拠として、ダを伴わない「～を 名詞と 思う」における名詞は述語として働いていないものとしている。

(51)a. 先生は花子をすごく美人だと思っている。

b. 先生は花子をすごく美人と思っている。

(以上、金賢娥 2012:57 の(36a, b)、下線筆者)

確かに、筆者の内省でも (51a)は(51b)より落ち着きが良いが、(51b)も不適格というほどではない。また、次のような例からは、副詞(二重下線部)が挿入される場合においてもダの使用は任意であるように見える。

(52)a. しかし、率直に言って、佐藤総理がニクソン声明に至るまでのアメリカ経済の動きについて正しい認識を持たず、情勢の推移についての確な判断力を欠いたことを、私はまことに遺憾だと思うのであります。

(国会会議録・第67回・衆議院本会議)

b. しかるに、この重要期間を何ら有効に役立て得なかつたということにつきましては、その後国内的にも、あるいは国際的にも、手きびしい批判が行なわれておるのでありますが、公平な立場から見まして、われわれもまたこれを認めざるを得ないので、まことに遺憾と思う次第であります。

(国会会議録・第1回・衆議院本会議)

(51)(52)の「美人だ」「遺憾だ」は形容動詞と見なせる語であるため、これまでの議論とは異なる点もあるかもしれないが、ダが有れば述語的だから副詞は共起できず、ダが無ければ述語的ではないから副詞は共起できないという説明は、(51b)(52b)が不適格であると仮定した場合に成り立ちうる主張である。「形容動詞語幹と」であれ「形容動詞語幹だと」であれ副詞的成分の共起が起こるとする判断に基づけば、「と」と「だと」を区別する手段としては有効ではない。なお中古語においても、「形容動詞語幹と」は次のように副詞的成分(二重下線部)が生起しうる。

(53) 大将、かの人のことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出でつばかりしかど、それにもあらざらむものゆゑとつつましうてなん。

(源氏・手習・6-364)

(54) …、久しくとだえたまはんことはいもの恐ろしかるべくおぼえたまへば、言に出でて言はねど、過ぎぬる方よりはすこしまつはしぎまにもてなしたまへるを、宮は、いとど限りなくあはれと思ほしたるに、かの人の御移り香のいと深くしみたまへるが、…

(源氏・宿木・5-434)

さて、本項で論じた以上のことを踏まえると、「例外的格付与」という見方に対し次の

ような疑問を呈することになる。すなわち、「～を 名詞だと 思う」において、「名詞だ」という形は、そもそも述語としての資格を持たないのではないか。述語格に立たない要素ならば、主格成分を要求するという見方を取る理由は無い。「名詞だと」がダの入らない「名詞と」と統語的性質において相違しないものと考えられるならば、“名詞だ”という述語に対する主格成分がヲ格で現れるのをどう説明したらよいか”というような考え方には結びつかず、テンス・モダリティといった述語らしさを示す重要な文法カテゴリーとの関係が希薄である点も説明がつくうえ、「なり」の挿入が起こらなかった中古語も現代語と大きく変わらないものとして捉えることができる。このことは、形容詞型の認識動詞構文「～を 形容詞終止形と 思う」についての分析にも一定の示唆を与えるように思われるが、その方向での検討は今後の課題としたい。

3 ニ型の用法—現代語との比較、及び「に」と「と」の相違

本節では、中古語のニ型について、ト型との比較や現代語との比較を通して分析を加える。

まず、ニ型の用例を観察すると、現代語と相違する点があるようである。

- (55) [朱雀院は] 姫宮の御事をのみぞ、なほえ思し放たて、この院 [=六条院] をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、内々の御心寄せあるべく奏せさせたまふ。(源氏・若菜下・4-176)
- (56) この中將をいみじき人におぼしめして、「なにわぎをし、いかなる官、位をか給ふべき」と仰せられければ、…(枕・二二七・364)
- (57) …ただ、あららかなる東絹どもを、押しまろがして投げ出でて、食物もところせきまでなん運び出でて、ののしりける。下衆などは、それをいとかしこき情に思ひければ、君も、いとあらまほしく、心賢くとり寄りにけりと思ひけり。(源氏・東屋・6-41)
- (58) つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。(源氏・葵・2-23)
- (59) 「(和歌) 君すまば我も吉野に跡絶えてかばかりも世にめぐらざらまし 年ごろは上一人をほだしに思ひ聞えつるを、今はそれよりも思ひ添はせ給ふこそ、この世をそむきやるまじき契りにやと心憂けれ」など、かりの御ありきとおぼせども、心深く立ち離れにくげに、万を聞えをき給ふ、世に知らず心深げなり。(浜松・二・263)
- (60) それめでたき事なれど、罪深しといふ事をいと憂き事におぼしたりしかば、

心苦しうこそはあらめ。

(栄花・二十・下-232)

(61) 春宮の御事を、いみじうしろめたきものに思ひきこえたまふ。

(源氏・須磨・2-178)

話者により判断は異なりそうであるが、筆者の内省では、(55)～(59)を現代語に置き換える形で次のような文を作ると不自然になるか、落ち着きが悪い。

(62) ??この院を後見人に思い、…

(63) ?この中将を、大変な人に思って、…

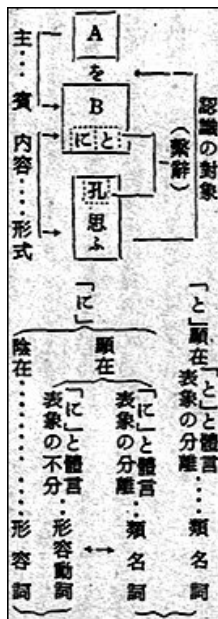
(64) ?それを、大変もったいないお情けに思ったので、…

(65) ?大將殿を、権勢のある家柄に思っているだろう。

(66) ?上様お一人を、私を束縛するものに思って
おりましたが、…

中古語のニ型はニで受けられる名詞の種類が現代語とは異なっているようである。中古語におけるト型との相違以外にも、現代語のニ型との相違という観点から眺めてみる必要がある。

また、前節ではト型の認識動詞構文にナリが挿入されない点に着目して考察を行ったが、ナリを用いない形が標準的であったということは、内容補充成分に名詞句を取る認識動詞構文(名詞型)は、ニ型とト型をひとまとめにして「名詞を 名詞に/と 思ふ」という文型として記述することもできる。川端(1958)は、主として上代語を検討対象としているが、ニ型とト型を捉えた図表3²⁵は、本稿で前節までにおいて見てき



図表3：川端(1958:27)におけるト型・ニ型の捉え方

²⁵ 図表3で、「に」の顕在するもののうち「に」と體言表象の不分」とされるものは形容動詞(の連用形)として位置付けられている。本稿でニ型とする構文のニは、一見すると名詞を受けているのか形容動詞の活用語尾であるのか判断しにくい、次のように、名詞を受けると判断すべき例は見出せる。すなわち(i)では「慰め」に連体修飾語「よろづの」が係っており、形容動詞の連用形では起こらない構造を取っている。

(i) 東宮かくておはしませば、時々こそ見奉りにも参らせ給へ、たゞこの姫宮をよろづの慰めにおぼしめしたり。(栄花・一・上-62)

次の2例から分かるように、形容動詞連用形は連用修飾されることはあるが、連体修飾を受けることはできない。

(ii) これから私は、山陰地方で眠ったように静かに暮らします。

(iii) *これから私は、山陰地方で眠ったような静かに暮らします。

(i)のように連体修飾語を受ける「～に」は、形容動詞連用形ではなく名詞+ニと分析するのが妥当であろう。なお現代語のニ型でも、次のように「～に」が連体修飾語を受けることはある。

た中古語の状況にも適用しうるものである。図表3において、Bに後接する繋辞としてニとトは並置され、「思ふ」の側にある「孔」にどちらかが入るという図式が示されている。中古の和文資料を対象とした本稿の調査結果では、ニ型が179例、ト型が76例と、ニ型の方が数量的には優勢であり、ニ・トを繋辞（コピュラ）として捉える見方は文体論的にも自然な解釈であろうと思われる²⁶。

ただし、同一文型で用いられるニとトに関しては、しばしばその相違点が論じられている。認識動詞構文のニ型・ト型についても何らかの相違点があるのではあるまいか。川端(1958:25-26)では、ニ型における「～に」は「形容詞的な判断賓辭性を具えたものに限られる」とされ、また「ト」とちがって、引用語（思ふ・云ふ）に対する内容部分は、内容であると共に引用語に対して密接な連用修飾の関係を保持し、内容が一つの観念事態として形態的にも獨立することを許さないのである」とも述べられており、ニはトと異なる性格を持つことを示そうとしているようである。川端(1958)の記述は、トにも当てはまるような内容の、不明瞭で直観的な記述に終始してしまっているが、ニの受けられる名詞の種類とトの受けられる名詞の種類が異なっていること、あるいは述語動詞「思ふ」の意味との関わり方にも差があることを示唆するものであろう。本節ではニの受ける名詞句の種類に着目し、ト型と引き比べつつニ型の持つ特徴を浮かび上がらせたい²⁷。

次ページ図表4・5では、中古語におけるニ型とト型の例からニ・トに前接する名詞句を抜き出し、集計した結果を示した。また図表6では、現代語のニ型の例について同様の集計結果を示した²⁸。これらの図表に示したデータを見比べながら中古語におけるニ型の用法について考察を進めたい。

-
- (iv) この大切な経験や、たくさんの貴重な体験などを、自分のほこりに思い、これからの自分の人生の大切さや、すばらしを少しずつ考え、自分の命の重さということ、大切にしていきたいです。(『広報ひろたむら』428号 p.4/http://www.town.tobe.ehime.jp/uploaded/koho_old/hirota/h1402.pdf, 2016年1月3日参照)

²⁶ 山田(1952:125)、築島(1963:682)などで示されるように、中古和文においては断定の助動詞タリの使用頻度が低い。断定の助動詞ナリ・タリは連用形であるニ・ト（コピュラ）と、名詞型の認識動詞構文におけるニ・トを同質のものとする見方は妥当と思われる。

²⁷ なお橋(1977:200)は、「断定の助動詞「なり」の連用形「に」を「なりと」の意で述語格に用いることがきわめて多い。」とし、次の例の下線部を「かしこき者なりと思ひける」の意に等しいものと考えている。

- (i) …わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人のみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、悔しまで思ひなりにけり。

(源氏・東屋・6-54、橋 1977:200 の例文 11 に相当)

しかし2. 1で見たとおり、「～を 名詞なりと 思ふ」という形の認識動詞構文は確例が見出しがたい。ニ型の認識動詞構文を、「～を 名詞なりと 思ふ」という、実在しない形に置き換えて理解するのは問題がある。

²⁸ 図表6に示したデータは、コーパス検索アプリケーション「中納言」により、サブコーパス「出版」（書籍・新聞・雑誌）の非コアデータを対象に次の共起条件を指定して検索を行った。

- ・語形—「ヲ」、品詞—大分類—名詞、語形—「ニ」、語彙素「思う」
- ・語形—「ヲ」、品詞—大分類—形容詞、語形—「モノ」、語形—「ニ」、語彙素「思う」
- ・語形—「ヲ」、品詞—大分類—形容詞、語形—「コト」、語形—「ニ」、語彙素「思う」

3. 1 現代語の二型と比較して

本項では、現代語と比較しながら中古語の二型の状況を概観する。

まず、図表4から分かる通り、中古語の二型でニが受ける名詞句は、全体的にみて評価形容詞・情意形容詞を「もの」「こと」などの形式名詞で受けて名詞化したものが多い。「こと」と「もの」との間にも何らかの相違点がある可能性は否定できないが、「こと」と「もの」とで形容詞の種類を見比べると、例えば「いみじきこと／いみじきもの」「たのもしきこと／たのもしきもの」のように一定の例数が得られるものは、両者に共通して現れる傾向が見て取れる。「こと」と「もの」の用法は、図表4に示した調査結果を見る限りではほぼ同様である。

- (67) ただ、中のこのかみにて、年もおとなびたまふを心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて申されけるなりけり。(源氏・東屋・6-32)
- (68) 九條殿の三郎君は、この頃東三條の右大将大納言など聞ゆ。冷泉院の女御いと時めかせ給ふを嬉しき事におぼしめさるべし。(栄花・二・上-73)
- (69) 若き人二三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまをゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり。(源氏・末摘花・1-282)
- (70) 上はよろづのことにすぐれて絵を興あるものに思したり。(源氏・絵合・2-376)

一方、現代語の状況を示した図表6では、そもそも全体の例数が多くないが、形式名詞を用いる例は見出しがたいことが分かる。次のような形は、現代語話者にはあまり好まれなくなってきたのであろう(調査により見出した両例とも外国文学の翻訳である点も留意される)。

- (71) …、残酷な行きすぎは好まないが、共和国の成功を祈り、また現在の成果をよるこばしいものに思っている。
(BCCWJ/Henri Troyat(著)・工藤庸子(訳)『女帝エカテリーナ』)
- (72) その夜、マーシュ・グレイアムは、歌姫デラをこよないものに思い、翌日、ウィーンの森へのドライブに連れだして、…
(BCCWJ/Violet Winspear(著)・安引まゆみ(訳)『恋のクルーズ』)

また、中古語の二型は、「その他」の欄に示した通り、ニで受けることのできる名詞句の種類が現代語よりも圧倒的に豊富であり、かなり生産性が高かったことが分かる。

- (73) 「かの北の方、これをいみじき宝に思ひて、これがことにつけて、わが妻を懲ぜしぞかし」と思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。(落窪・二・168)
- (74) あまりのゆゑ、よし、心ばせうち添へたらむをばよるこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをもあながちに求め加へじ。(源氏・帚木・1-65)
- (75) 僧をとぶらはせ給ふを御形見におぼしめしたり。(栄花・三十九・下-510)

「〜こと」と「〜もの」とで
連体修飾語が共通するもの

図表4: 二型においてニが受ける名詞句(中古語)			
〜こと		〜もの	
あはれなること	1	あはれなるもの	2
いみじきこと	10	いみじきもの	14
うきこと	1	うきもの	4
うれしきこと	2	うれしきもの	1
おそろしきこと	1	おそろしきもの	3
かなしきこと	2	かなしきもの	2
くちをしきこと	2	くちをしきもの	2
こころうきこと	1	こころうきもの	1
こころぐるしきこと	2	こころぐるしきもの	1
たのもしきこと	4	たのもしきもの	5
めでたきこと	2	めでたきもの	3
をかしきこと	1	をかしきもの	1
あかぬこと	2	あさましきもの	1
あやしきこと	1	あたらしきもの	1
うれはしきこと	1	いぶかしきもの	1
くるしいこと	2	いまいましきもの	1
こころもとなきこと	1	うしろめたきもの	1
たのむこと	1	うつくしきもの	2
つきせぬこと	1	おきがたきもの	1
にげなきこと	1	かぎりなきもの	4
みならはむこと	1	かしこきもの	2
めづらしきこと	1	かたじけなきもの	1
めやすきこと	1	きょうあるもの	1
やすからぬこと	3	くまなきもの	1
ゆるさぬこと	1	ことごとしきもの	1
よからぬこと	1	つつましきもの	1
「〜こと」合計	47	なめげなるもの	1
「〜もの」合計		慰め奉るべきもの	1
		ならびなきもの	1
〜形式名詞(「こと」「もの」以外)		はづかしきもの	2
うたであるすぢ	1	おしなべてのさま	1
おしなべてのさま	1	ふさはしからぬもの	1
さるべきさま	1	ふさはしきもの	1
しだいのさま	1	ふたつなきもの	1
のたまはせしさま	1	またなきもの	7
へだてなきさま	1	むつまじきもの	1
わづらはしきおほんあたり	1	めざましきもの	1
〜形式名詞 合計	7	やむごとなきもの	1
		ゆかしきもの	2
		わろきもの	2
		「〜もの」合計	80
		あきがた	1
		いちくるしきに	1
		いろふし	1
		いみじきひと	1
		いみじきたから	1
		うれしき	1
		おほんうしろみ	1
		おほんかたみ	1
		おほんかはり	1
		おほんなげき	1
		かうけ(豪家)	1
		かぎり	2
		おほんなげ	1
		かしこきなさけ	1
		か	2
		きこえあはせびと	1
		こころやりどころ	1
		ことのほか	1
		たぐひなき	1
		たのみ	2
		たのもしき	1
		たのもしびと	1
		つ	1
		とりどころ	2
		なぐさめ	4
		なげき	1
		ほだし	3
		みも	1
		めんぼく	1
		もてあそびぐさ	1
		よす	1
		よそ	2
		よのすゑ	1
		よるべ	1
		よろこび	1
		その他合計	46

図表6: 二型においてニが受ける名詞句(現代語)

〜もの	
こよないもの	1
喜ばしいもの	1
「〜もの」合計	2
その他	
誇り	25
疑問	3
重荷	1
恥	1
不信	1
負担	1
身内	1
その他合計	33

図表5: 卜型においてトが受ける名詞句(中古語)	
〜こと	
あさましきこと	1
あるまじきこと	1
おなじこと	2
およびなきこと	1
かからんとすること	1
かかるたびにあること	1
かかるべきこと	1
かぎりなきこと	1
かたじけなきこと	1
たいだいしきこと	1
ながかるべきこと	1
にげなきこと	1
やすからぬこと	1
「〜こと」合計	14
〜もの	
うきもの	1
うらめしかるべきもの	1
ひさしきもの	1
みじかきもの	1
みるべいもの	1
よにあるもの	1
わりなきもの	1
「〜もの」合計	7
〜形式名詞(「こと」「もの」以外)	
おほしよるかた	1
にげないほど	1
めやすきほど	1
「〜形式名詞」合計	3
その他	
あまのがは	1
あらぬひと	1
あるじ	1
うきみ	1
まじらひのはじめ	1
おほんうしろみ	1
かぎり	5
かたみ	4
かたらひびと	1
きのふけふ	1
ことしき	2
すぎにしみ	1
そ	1
だ い	1
たまさかなるひと	1
たまぬうてな	1
たれ	1
つゐのいへ	1
な	14
は	1
ひと	1
ま	3
宮の中將	1
めでたきところ	1
よす	1
よそのなきさ	1
わがそで	1
われのみ	1
その他合計	51

(76) 径しうとも、またなく思かしづき聞えんを、取所に思せかし。

(狭衣・一・103)

現代語では、「〜を誇りに思う」の形が慣用的に多く用いられる以外は例が少ない。

(77) オレは昔から爺ちゃんのことを誇りに思ってたよ、ずっとオレの憧れだった!

(BCCWJ/岩井恭平『消閑の挑戦者』)

- (78) 新入社員時代に厚生課で給食係を命じられたとき、毎日の食材の残りがあまりに多いことを疑問に思い、毎日食堂で残り物のチェックをし、データ化したという逸話です。 (BCCWJ/『FRIDAY』2005年7月29日号)

以上の状況をどのように捉えたら良いか。阿部忍(2001)は、現代語における二型の認識動詞構文「XがYをPに思う」は、「XにはYがPだ」という文に言い換えが可能であるとしている。確かに、次の(79)と(80)とは意味的に近い構造を持つように見える。

- (79) 太郎は家族との思い出を宝物に思った。 (阿部忍 2001:3 の(15))

- (80) 太郎には家族との思い出が宝物だ。 (同:4 の(29))

しかし、このような操作で現代語における二型の認識動詞構文の文法的特徴を一般化することには無理があるのではないだろうか。例えば次の(81a)(82a)を言い換えた(81b)(82b)は容認度が落ちる。

- (81)a. たぶん、[叔母は] 弘志を身内に思っていて、他人の男性とは考えていないだろう。 (BCCWJ/北原童夢『秘宴』)

- b. ?叔母には、弘志が身内だ。

- (82)a. 長政はこのことを恨みに思っていたらしい。 (BCCWJ/Yahoo!ブログ)

- b. ?長政には、このことが恨みだ。

また、阿部忍(2001)ではこれと逆の操作である「XにはYがPだ」から「XがYをPに思う」への書き換えが常に可能とされているわけではないが、次のように(83a)を言い換えた(83b)が不自然になる場合があることも考え合わせると、「XがYをPに思う」と「XにはYがPだ」という2つの文型を、何らかの関係を持つものとして捉えるのには慎重にならざるをえない。

- (83)a. 私には彼が部長に昇格したことが驚きだ。

- b. ??私は彼が部長に昇格したことを驚きに思う。

現代語の二型は、「～を誇りに思う」などの慣用的な形に固定化しつつあるのであって、規則性を見出そうとすることには限界があるようである。

ただし、阿部忍(2001)において、二が受ける名詞句は「主観的」な語であり、文の主語がその「主観」のありかになるとされる点は一定の示唆を持つものであろう²⁹。二の受ける名詞句は、「思う」の主体以外の人物による評価内容を示す形にすることはできないという制限が観察される。

- (84) 私は、息子を誇りに思う。

- (85) ??私は、息子を妻にとっての誇りに思う。

(84)の「誇り」は「思う」の主体である「私」の評価内容であって、別の人物のものにはなりえない。そしてこの制約は、中古語の二型の例についても観察される。

²⁹ 田野村(1995:86)は、「あらためて論じるまでもない自明のこと」と断りつつ、「主観的/客観的」という用語は解釈の幅が広く、使用を避けるか概念を明確にすべきであることを述べている。

- (86) まして、さりぬべきついでに御言の葉も、なつかしき御気色を見たてまつる人の、すこしもの的心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえん、明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。
(源氏・夕顔・1-149)
- (87) 四・五の御方々おはすれど、この女御と寝殿の御方とをのみぞ、いみじきものに思ひきこえ給ける。
(栄花・四・上-134)
- (88) …「世には、かかる児もありけり」と、あまりゆゆしう、この世の物とも見えさせ給はずいみじき御有様を、わが世の末に思し召さるる、いとあはれに見たてまつらせ給けり。
(狭衣・二・183)
- (89) そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。
(源氏・若菜上・4-136)
- (90) 親腹の五宮をばいみじう愛しおぼし、女腹の六宮をば殊の外にぞおぼされける。
(栄花・八・上-247)
- (91) 母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて月ごとの御念仏、年に二たびの御八講、をりをりの尊き御宮みばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、この君の出で入りたまふを、かへりては親のやうに頼もしき蔭に思したれば、…
(源氏・匂宮・5-23)

(86) (87) のように情意・評価を表す形容詞を「こと」「もの」で名詞化したものが「思ふ」の主体の持つ情意・評価を表すことは分かりやすい。こうした例が多い点は、先に指摘した通りである。実質の意味を持つ名詞を用いる(88)～(91)でも、いずれも「思ふ」の主体の個人的な評価の内容として解される。(88)のように「思ふ」の主体が(二重下線部)が明示される場合もある。中古語では、現代語のように慣用的な形に固定化しつつある状況とは異なり³⁰、「思ふ」の主体による評価内容を示すものであればかなり自由に用いられたと言えよう。

³⁰ 中世後期において既に固定化していたようである。中世後期の資料8種(『湯山聯句抄』『六物因抄』『中華若木詩抄』『中興禅林風月集抄』『天草版平家物語』『エソポのハプラス』『コリヤード懺悔録』『大蔵虎明本狂言集』)において「思ふ」類を調査した結果では、二型の確例は次の2例しか見出せなかった。(i)の「～をたのみに思ふ」と(ii)の「～をよそに思ふ」は中古語にも存した形である。

- (i) 下京のやつは、ぼうつかひを男にもち、又上京のをたのみに思ふたれば、長つかひをもつたと云。
(大蔵虎明本狂言集・どん太郎・中-258)
- (ii) なにごとかわ知らねども、清盛きつと西八条え具し奉れと、あると言わせられたれば、少将この事を心得て、近習の女房たちを呼び出だいて、ゆうべ何とやら世上がもの騒がしゅうござつたを、例の山法師のくだるか、などとよそに思うてござつたれば、はやそれがしが身の上になつてござる。
(天草版平家物語・一・81)

3. 2 ト型と比較して

本節冒頭で見たように、中古語の名詞型は「～を 名詞 {に／と} 思ふ」という文型として二型とト型を並行的に捉えることが可能である。二型において情意・評価の意味を持つ名詞しか用いられないならば、ト型よりも用いられる名詞の種類が少ないことになるだろう。そこで、図表4・5によって二型のニが受ける名詞句とト型のトが受ける名詞句を見比べると、決定的に異なる点として、ト型では指示的名詞句³¹や、「何」「誰」のような不定語が用いられるが、二型ではそうした例が用いられないということが挙げられる。

- (92)a. 供なる人々見て、いふを聞きて、男、「かう近きことのうれしきこと。これをば天の川となむ思ひぬる」などいはせて、… (平中・十三・447)
- b. 「われをば宮の中將とや思ふらん」と、あはれに心ぐるしく思しやる。
(寢覚・一・67)
- c. (和歌) 七夕を過ぎにし君と思ひせば今日は嬉しき秋にぞあらし
(栄花・九・上-306)

- (93)a. この世の事をおぼしめさぬには、後の位を何とかおぼしめさん。
(栄花・三十六・下-455)
- b. 院「いとくなくおぼしめしそ。世中に侍らん限、誰を誰と思侍べき身ならばこそ」など、聞えさせ給て、御直衣の袖もいと所せげにおはしませば、
… (栄花・二十五・下-187)

(92)の「天の川」「宮の中將」「過ぎにし君」は、具体的な唯一の事物を表す指示的名詞句であり、また(93)の「何」「誰」は不定語である。ト型においては、不定語の「何」の使用が14例と目立っているが、二型では用いられない。指示的名詞句は、「思ふ」の主体が情意・評価を持つか否かに関係なく存在する、ある特定の事物を示すものである。また不定語は、その示すところのものが決まっておらず、やはり主体が持つ情意・評価を意味するわけではない。二型のニが受ける名詞句は「思ふ」の主体が持つ情意・評価の内容に限られるために、そうした名詞句を用いることができないものと説明できよう。

また、前項で現代語と比較しながら指摘した通り、二型では情意・評価を表す「～こと／もの」という名詞句の例がかなり多いが、ト型においてはやはりそうした傾向は見取れない。ト型は、二型のように「思ふ」の主体が持つ個人的な情意・評価との結びつきが存在する表現に限られるわけではないため、形式名詞を伴う「～こと」「～もの」という形でも、次の(94)のように情意・評価を表す例に限らず、(95)のように情意・評価の意味合いが取りにくい例も見出せる。

³¹ 「指示的名詞句」という用語は西山(2003:61)に従う。「世界のなかのなんらかの対象を指示する (refer to) という機能」をもつ名詞句を指す。

- (94)a. 浅葱にて殿上に還りたまふを、大宮は飽かずあさましきことと思したるぞ、
ことわりにいとほしかりける。(源氏・乙女・3-21)
- b. 「一くだりの御返は、見すべき物」とも、思したらざりしも [=女二の宮
が一行の返事は出すべきものだともお思いでなかったことを]、「我心の、
あながちに盡し染めして一かた [=源氏の宮] よりほかに、嘆きの森に枝
さし添へじ」と、せちに、思はなれし折 [=一源氏の宮以外の女性から気
持ちを遠ざけていたとき]こそ、これ [=女二の宮が返事をしないこと]
を、強みて、「恨めしかるべきもの」と思はざりしか。(狭衣・三・222)
- (95)a. …、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にも
なるやうなるありさまを、長かるべきこととは思はねど、見るかぎりは憎
げなき御心ばえもてなしなるにやうやう思ふこと薄らぎてありつるを、…
(源氏・宿木・5-403)
- b. (和歌) 行く末をみじかきものと思ひなば目のまへにだにそむかざらん
(源氏・総角・5-337)

以上に見たように二型は、ト型に比べると中古語において使用頻度が高いが、内容補充成分に取れる要素は「思ふ」の主体の個人的な情意・評価を表すものに限られるという制限がある。川端(1958)は、上代語を対象として、ト型の「〜と」は二型の「〜に」に比べ「思ふ」に対して「密接な連用修飾」をするものとしているが、「〜に」の持つ情意・評価といった特徴は、思惟を表す「思ふ」という動詞と意味的に重なってくるのが直観的に把握される。その点では、「〜と」に比べて「〜に」の方が「思ふ」に対して緊密な関係を有するという見方も可能かもしれない。そのような制限があるにも関わらず、二型の使用頻度がト型よりも高いのは、中古語の各資料が語り手や登場人物の心情描写を好むというような作品内容の傾向と関わるところが大きいのではないだろうか。

4 形容詞型—連用形型と終止形型

本節では、内容補充成分に形容詞を用いるタイプ(形容詞型)の認識動詞構文について、終止形型「〜を 形容詞終止形と 思ふ」と連用形型「〜を 形容詞連用形 思ふ」とを比較することによりそれぞれの持つ特性を考えたい。

4. 1 先行研究

まず中古語の形容詞型に関する先行研究を確認する。橘(1977:198)は、次のような連用形型の認識動詞構文の例を挙げ、下線部について、「「思ふ」ことの内容が形容詞の連用形で並立になっている。「わづらはしと思ひ、心苦しと思ひ聞えさせ給ひける」という

述語格である」と説く。すなわち、連用形型と終止形型は同義であり、置き換え可能だとの見方が示されていると言えよう。これとほぼ同様の見方は、時枝(1959:44)、進藤(1978:12)、和田(1987:150)、坂井(1987:56-57)、佐藤(1988:669-671)、重見(1990:10)、安本(2009:115)などにも示されている。

- (96) 〔弘徽殿女御は〕人よりさきに参りたまひて、〔帝の〕やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、〔帝は〕この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

(源氏・桐壺・1-19、橘 1977:198 の例文 3 に相当)

これに対し、吉村(1994)は、『源氏物語』(桐壺〜藤裏葉)の調査を行い、連用形型の認識動詞構文は「～を ～と 形容詞連用形 思ふ」のように引用句「～と」が共起する例が見られるのに対し、終止形型の認識動詞構文は「～を ～と 形容詞終止形と 思ふ」のように引用句「～と」が共起する例が見出せないとする。

- (97) 齋宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思ひきこえたまふ。

(源氏・澤標・2-309、吉村 1994:31 の(13)に相当)

また吉村(1994)は、連用形型は話し手と「思ふ」の主体が一致する例の割合が高いのに対し、終止形型は話し手と「思ふ」の主体が一致しない例の割合が高いことを指摘している。そして、以上のような統語的特徴・使用傾向などを踏まえ、連用形型の認識動詞構文における形容詞連用形は「思ふ」の主体の心理状態を話し手が自らの「主観」によって示すものであり、終止形型の認識動詞構文における形容詞終止形は話し手が「思ふ」の主体の思惟内容を「客観的」に叙述するものであると結論する。従来の研究とは異なり、連用形型と終止形型の相違点を明らかにしている点で注目される。

ただ、連用形型は引用句「～と」を付加して「～を ～と 形容詞連用形 思ふ」という形を取ることができたのに対し、終止形型は引用句「～と」を付加して「～を ～と 形容詞終止形と 思ふ」という形を取ることができないという指摘は、両者の統語的な構造の相違を示すものであるが、両者の意味的な相違点をも示す現象かどうかは不明である。吉村(1994)は、連用形型における形容詞連用形は「〈内容〉との併置が可能であるゆえに、むしろ〈内容〉以外の成分である可能性が予測される」(筆者注:〈内容〉とは、主体の具体的な思惟内容のこととされる)とするが、引用句「～と」が〈内容〉を示す成分であることは疑いの無いものとしても、形容詞連用形が〈内容〉を示す成分ではない可能性とは、どのような根拠に基づき「予測される」のだろうか。日本語において、併置される2つの成分の意味役割が同じであってはならないという原則は特に存在しないものと思われる³²。連用形型は話し手の主観が反映されるが終止形型は客観的な

³² 拙稿(2015)では、現代語と中古語において引用句「～と」が2つ併置される「～と～と 述語」という構造の文を分析した。引用句「～と」に限らず、次の(i)(ii)のように、同じ意味役割を担う「～を」「～へ」のような格成分や「～ために」のような節も併置される。

表現になるという指摘も、使用傾向として認めることは可能かもしれないが、吉村(1994)の示すデータにもあるとおり、話し手と「思ふ」の主体が一致しない連用形型の例や、一致する終止形型の例も無視できない程度の例数が存在するようである。なお、吉村(1994)ではヲ格成分が文中に生起していない例も含めたデータを用いており、必須成分であるヲ格成分が生起した認識動詞構文の確例のみを分析しているわけではない。

本稿では、2節・3節で行った名詞型の分析と同様の観点から、内容補充成分の語彙的特徴(形容詞語彙の状況)を整理することによって、連用形型と終止形型の相違点に迫りたい。

4. 2 実例の状況

調査の結果、形容詞型は終止形型が292例、連用形型が348例と、名詞型(ト型76例・ニ型179例)に比べ多くの用例を得ることができた。次ページに示す図表7・8は、形容詞型の内容補充成分に現れた形容詞語彙を示したものである³³。図表7では、終止形型と連用形型の両方で見られた形容詞語彙を集め、両者の用例数を比較して終止形型で用いられる例数が優勢の形容詞から順に上から並べて示してある。最右列には終止形型で用いられた形容詞の例数を連用形型の例数で割った値を示した。この値が大きければ終止形型が優勢で、小さければ連用形型が優勢ということになる(統計学的にはそれぞれの形容詞は終止形型か連用形型の用例数が一定量に達していることが求められるのであろうが、資料的な制約があることは避けられない)。一方、図表8では終止形型と連用形型のうち一方のみに現れた形容詞語彙を示してある。

-
- (i) たとえば室内装飾においては、人生の世相を、生活を、そこでもかみされる人びとの気分を、それらの流れるままのものを、絃楽器の精巧な演奏を交えて、壁へ、天井へ、生活の伴奏として創作したいのである。(BCCWJ/内井乃生『彩布』)
- (ii) 今まで御活躍で、高知県のために、四国のために、国のために働いてこられた公務員が、その日からもう職は失い、そして妻や子は路頭に迷う。

(国会会議録・第142回・参議院常任委員会)

³³ 形式的に、連用形型と同様のものでも、次のような例における形容詞連用形(下線部)は「思ふ」の内容を示すのではなく、「思ふ」という思惟の深さといった外面的状態を表す(状態修飾を行う)と解される(小田2015:289においてもこうした修飾のあり方が紹介されている)。

(i) (和歌) しほの満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが (枕・二一 52)

(i)の「ふかし」の他、「こころふかし」「あさし」「つよし」「こころづよし」も「思ふ」の外面的状態を示すものと解されるため、連用形型の用例としては計上していない。それ以外の形容詞が用いられた例は、「思ふ」の内容補充成分か「思ふ」の状態修飾成分か判断の難しいものもあるが、連用形型と認め例数を計上してある。

図表7: 終止形型・連用形型に共通する
形容詞(中古語)

	終止形型	連用形型	合計	終止形型 連用形型
つら	17	2	19	8.50
あさま	6	1	7	6.00
もの	5	1	6	5.00
わび	5	1	6	5.00
めでた	10	2	12	5.00
あや	18	6	24	3.00
うつく	5	2	7	2.50
うれ	30	14	44	2.14
をか	10	6	16	1.67
いとほ	9	6	15	1.50
かな	14	10	24	1.40
ねた	7	5	12	1.40
めづら	4	3	7	1.33
わりな	4	3	7	1.33
はづか	9	7	16	1.29
くる	7	7	14	1.00
らうた	3	3	6	1.00
あいな	2	2	4	1.00
いふか	1	1	2	1.00
うれは	1	1	2	1.00
こころ	4	5	9	0.80
かはら	5	7	12	0.71
いみじ	21	31	52	0.68
うらめ	5	8	13	0.63
こころ	6	10	16	0.60
こころ	3	5	8	0.60
さうぎ	3	6	9	0.50
おそろ	2	4	6	0.50
つつま	2	4	6	0.50
かたじ	1	2	3	0.50
くや	1	2	3	0.50
こころ	1	2	3	0.50
うしろ	2	6	8	0.33
こころ	1	3	4	0.33
くちを	7	23	30	0.30
かぎり	2	8	10	0.25
はした	1	4	5	0.25
みすて	1	4	5	0.25
こひ	2	9	11	0.22
ゆゆ	1	5	6	0.20
こころ	3	18	21	0.17
こころ	1	6	7	0.17
ゆか	2	13	15	0.15
延べ語数	244	268	512	
異なり語数		43		

図表8: 終止形型・形容詞型の方のみに
見られた形容詞(中古語)

終止形型		連用形型	
う	10	おぼつか	7
にく	6	よろ	5
から	4	うらやま	3
めざま	3	びんな	3
あ	2	むねいた	3
ありが	2	やむごと	3
いた	2	わすれが	3
よ	2	あやふ	2
あちき	1	いと	2
あつ	1	いぶせ	2
あはあ	1	うと	2
あへ	1	おな	2
うれた	1	こよ	2
おほけ	1	なげ	2
かどか	1	むくつ	2
かひ	1	むつ	2
かろが	1	あなづ	1
きらき	1	あなづ	1
こころ	1	いま	1
ほいな	1	うた	1
ほ	1	うた	1
みぐる	1	うら	1
めやす	1	おだ	1
もどか	1	おも	1
を	1	かし	1
延べ語数	48	きき	1
異なり語数	25	けう	1
		こころ	1
		こころ	1
		こと	1
		こと	1
		しず	1
		す	1
		す	1
		た	1
		た	1
		た	1
		た	1
		と	1
		とし	1
		な	1
		な	1
		な	1
		なら	1
		ひ	1
		ま	1
		ま	1
		み	1
		み	1
		よ	1
		延べ語数	80
		異なり語数	51

終止形型と連用形型を見比べると、用いられる形容詞語彙の共通部分が大きいことがわかる。延べ語数にして形容詞型 640 例中 512 例が図表 7 に入り、異なり語数でも 46 種の形容詞が終止形型と連用形型の両者で用いられている。図表 8 からは、終止形型と連用形型とで、一方のみに用いられる形容詞語彙はほとんどが 1~3 例であり、いずれかの型を特徴付ける語を見出しにくいことがわかる³⁴。このように見る限り、終止形型と連用形型はよく似ている。しかし図表 7 を見ると、終止形型が優勢の形容詞（「つらし」「あさまし」「ものし」など）と、連用形型が優勢の形容詞（「ゆかし」「こころもとなし」「こころぐるし」）とを認めることもでき、これらの両極の間に連続的に様々な形容詞が並ぶという分布状況を見て取ることができる。終止形型を好むか連用形型を好むかあるいは中間的性格を持つかは、個々の形容詞の語性に関わるものと思われる。

4. 3 形容詞の意味と終止形型・連用形型の選択傾向

個々の形容詞が持つ個別的な語性が、終止形型と連用形型のどちらと結びつきやすいかに関わるならば、図表 7・8 に示した形容詞語彙の分布状況を説明するためには一つ一つの形容詞の意味・用法を参照しなければならないだろう。しかし、個々の形容詞について見たとき、終止形型と連用形型とで用例数を合わせても数例程度しか得られないものが多く、分析に堪える量を確保するには困難を伴う。本稿では、多少恣意的な基準設定にはなるが、終止形型と連用形型とで合わせて 10 例以上を得られた形容詞を選ぶ。終止形型が優勢なものから順に「うし」「つらし」「めでたし」「あやし」「はづかし」「うれし」「をかし」「いとほし」「かなし」「ねたし」「くるし」「かたはらいたし」「いみじ」「うらめし」「こころうし」「くちをし」「かぎりなし」「こひし」「こころぐるし」「ゆかし」「～がたし」³⁵の 21 語を取り上げ、その意味・用法を参照し検討を進めることとした。

方法として、吉田(1995b)及び安本(2009)における形容詞分類のうちでいずれに該当するか、また『日本国語大辞典』(第2版)の意味記述と、管見に入った先行研究の意味記述を参照することにした。

まず次に示す形容詞類型は、吉田(1995b)で示されたものを筆者がまとめなおしたものである。吉田(1995b:113)は、「区分間の峻別が要求される分類(classification)」というよりも個々の語に見出し得る差異のなかから類似点を抽象してつくられた型、すなわ

³⁴ 終止形型のみに用いられる「うし」の 10 例は注意されるが、蜂矢(2001)で論じられているように、一音節語幹の形容詞は音節数を増やす傾向を持つという形態論的特性があり、そうした特性が関わって「うく」よりも「うし」が選択される可能性も否定できず、直ちに終止形型と連用形型の統語的・意味的相違を示すものと判断できるかは分からない。

³⁵ 接尾辞「がたし」により形容詞化したものも 10 例あり、様々な動詞に付くが、共通する表現性を持つため他の一語の形容詞と同様に「～がたし」で 1 種類の形容詞とする。

ち類型 (type) と呼ぶ方がふさわしい」と述べ、意味的観点から形容詞を截然と分類することは難しいとしながらも、中古語の形容詞をA・B・C群に配属させ、その下にいくつかの下位区分を設けている。意味的観点による形容詞のタイプ分けとして参考にしたい。

A群：情意的な意味を持つ形容詞

- ・感情形容詞：現在の言い切り文の場合には感情主体としての主語が一人称になるという制限があると解釈される語、すなわち狭義感情形容詞
- ・評価形容詞：情意的意味を持ちながら主語の制限が無く感情主体の心理内容の表現よりも対象への指向が強いもの

B群：AにもCにもあてはまらないか、中間的と考えられる形容詞

- ・否定形容詞：「なし」
- ・程度形容詞：「いみじ」「いたし(甚)」
- ・感覚形容詞：「あかし(明)」「あつし(暑)」など
- ・時間形容詞：「とし(疾)」「はやし」「おそし」「ひさし」

C群：属性的な意味を持つ形容詞

- ・次元形容詞：「せばし」「たかし」「ちかし」「とほし」など
- ・色彩形容詞：「あかし(赤)」「あをし」「くろし」「しろし」「こし(濃)」など
- ・その他：「あたらし(新)」「わかし」など

図表9では、安本(2009)による形容詞分類についてその概略を示し、また、安本(2009)による『源氏物語』の用例調査結果の表を引用した。この調査では『源氏物語』での使用回数が20以上の形容詞205語が検討対象とされている。安本(2009)の分類は、形容詞の構文的な性格に基づくものであり、客観性が高い。

これらを踏まえ、図表10を見たい。図表10では、終止形型・連用形型とで合わせて10例以上得られた形容詞21語について、吉田(1995b)の類型及び安本(2009)の分類での該当項目を示し、『日本国語大辞典』(第2版)による意味記述、また管見に入った先行研究の要点を示した(終止形型が優勢の形容詞から順に並べてある)。

中古語の形容詞に関しては個々の語の意味を記述する試みが少なからずあり、本稿で取り扱う21語の形容詞のうち16語(「つらし」「めでたし」「あやし」「はづかし」「をかし」「いとほし」「かなし」「ねたし」「かたはらいたし」「いみじ」「うらめし」「くちをし」「こひし」「こころぐるし」「ゆかし」「～がたし)について、そうした個別的な研究を参照することができた。

特徴			割合	異なり語数	用法	連用修飾	用法	連体修飾	用法	連体修飾	分類番号		
割合	異なり語数	観点											
述語用法： ・終止形の形で言い切りとして用いられたもの ・終止形に助詞「と」「とて」「とも」「など」がつくもの ・終止形に詠嘆・感動を表す「や」「かし」が付されたもの ・係り結びの述語として連体形・已然形で終止したもの ・語幹単独で文の言い切りとして用いられたもの 連体修飾用法 ・ <u>述語的連体修飾用法</u> ：「火明かき方」のように2語以上で句を形成して体言を修飾しているもの ・ <u>非述語的連体修飾用法</u> ：「近き御几帳」のように句を形成せずに体言を修飾しているもの 連用修飾用法 ・ <u>述語的連用修飾用法</u> ：「思ふ・おぼゆ・見ゆ・聞こゆ」などを修飾し判断や思惟の内容を表すもの ・ <u>非述語的連用修飾用法</u> ：それ以外のあり方で動詞・形容詞・形容動詞を修飾するもの			75%	155	述語用法有り	43%	88	○	○	○	○	○	A
			3%	6	×	○	○	○	○	○		B	
			11%	23	○	○	○	×	○	○		C	
			2%	4	×	○	○	×	○	○		D	
			1%	1	○	○	×	×	○	○		E	
			11%	24	○	×	○	○	○	○		F	
			4%	9	○	×	○	×	○	○		G	
			4%	9	○	○	○	○	×	×		H	
			7%	14	○	○	○	×	×	×		I	
			6%	12	○	×	○	○	×	×		J	
			7%	14	○	×	○	×	×	×		K	
			1%	1	×	×	×	×	×	×		L	
			100%	205		合計							

図表 9：安本(2009)による形容詞分類の概略、及び『源氏物語』における構文的機能別の形容詞分類（安本 2009:114 の表 1）

図表 1 0：形容詞型と連用形型とで合わせて 10 例以上が得られた形容詞の意味・用法					
吉田(1966)の分類	安本(2009)の分類	形容詞	例数		意味・用法
			終止形型	連用形型	
(なし)	A	うし	10	0	意味・用法 『日本国語大辞典』(第2版)の記述から、中古語の段階で認められる意味・用法の要点をまとめて示す。また、意味・用法についての先行研究があるものはその要点を示す(いずれも原文そのものの引用ではない)。 ・ <u>波下線</u> ：表現主体が捉えた対象の状態についての記述 ・ <u>一重下線</u> ：表現主体自身の情意の状態についての記述 ・ <u>二重下線</u> ：表現主体が捉えた対象の状態を示す場合と、表現主体自身の心情の状態を示す場合とで、どちらの用法の例数が多いか、あるいはどちらが原義であるかに関する記述
(なし)	A	つらし	17	2	物事が思いのままにならないことを嘆きという心情を表す。また、そのような心情を起こさせる物事の状態についても用いる。(1)ある状態をいとおしく、不愉快に思うさま。いやだ。(2)心が重苦しく閉ざされたさま。(3)つらい、やりきれないと思うような不本意な状態。自身にとっては、不遇、不運を嘆く意となり、他に対しては、みじめなさま、無残なさまを気の毒に思う意となる。 〔一〕非情であるさま。(1)他に対する態度・仕打ちなどが、むごい。非情だ。(2)主に男女の間柄で、態度・仕打ちなどが冷たい。薄情だ。すげない。 〔二〕耐えがたく思うさま。(1)人の気持を考えない冷たい仕打ちや態度などが、耐えがたく、恨めしい。(2)ある事柄・情況・環境などが、身を切るように耐えがたい。

					熊谷 (1998)	「つらし」の対象は、非常にあからさまに我をないがしろにし「我を疎外する」行為・態度であるか、少なくとも心情主体にはそう受け取れるもの。	
(評曲)	A	A	めでたし	10	2	(1)見た目に魅力的な状態で、ほめたたえるに値する。(2)食べ物の味がすぐれている。(3)声や音などが、趣があつてすぐれている。(4)すぐれていて崇め尊ぶに値する。(5)評判・権勢・待遇などの度合がすぐれている。(6)書、絵、和歌などがすぐれている。	
						武山 (1981, 1983)	「めづ」「いたし」を語源とする。「まことに結構で賛嘆が以外に無い」が原義。「めでたし」の本質は、「 <u>価値の高さ</u> 」と規定したい。
(評曲)	A	A	あやし	18	6	(1)人の知恵でははかれないような不思議さである。(2)普通と違うところがある。(3)物の正体、物事の真相、原因、理由などがはっきりとつかめない状態である。(4)普通であればしないような、道理や礼儀にはずれたことをして、非難されるべきである。(5)（貴族の目から見て理解しがたく、奇異なさまである意から）(イ)乱雑だったり、粗末だったりして見苦しい。(ロ)身分が低い。素性がはっきりしない。	
						村上 (1983)	日本国語大辞典の記述のうち、(1)の例と(2)の例が多い。「ものの正体・事件の真相・原因理由などがわからなくて疑わしい・いぶかしい」などの意味の例数は多くない。
(感書)	A	A	はつかし	9	7	(1)過ち、欠点、罪などを悟って面目なく感じるさま。(2)自らひかえめになるようなさま。(3)こちらが気おくれるほど、相手が優れているさま。	
						進藤 (1974)	文献上、「こちらが恥かしくなるほど相手が立派だ」の意の例が出るのは『宇津保物語』『落窪物語』以降のもので、それより前の資料には出ない。
(感書)	A	A	うれし	30	14	物事が、その人個人にとって、望ましい状況にある、満足される状態にあると感じたときに生じる感情で、思わず笑顔になるような、明るく晴れやかな快い気持をいう。また、やや転じて、ある行為またはその行為をした人物に対する感謝、満足の気持を表す。	
(評曲)	A	A	をかし	10	6	【一】普通と違って、笑うべきさまである。(1)滑稽なさま。(2)軽蔑の笑いをおぼえるさま。【二】普通と違って格別な趣があるさま。賞すべきさまである。魅力のあるさまである。	
						池田 (1953)	次のような興味を持つ。(1)対象から受ける新鮮な感覚から起こること(2)それは対象の珍奇性に関係のあること(3)全体に知的要素の多いこと(4)即興的で、明るい調子
						細井 (1980)	「美しい・わかわいらしい・おもむきがある・興味ぶかい・けっこうである・風情がある・風雅である・上品だ」などの解釈があり、多義性を持つ。人の容姿・心情・自然現象・住居・調度・筆跡・音・響応に使用する。
						吉田 (1987)	『栄花物語』では、「普通と違って笑うべきさまである」を表す例は少ないが、「普通と違って格別なおもむきがあるさま」を表す例は多い。
(評曲)	A	A	いとほし	9	6	(1)自分にとって面白くないと思う心情を表す。(2)他人に対する同情の心を表す。かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。(3)弱小なものへの保護的な愛情を表す。かわいらしい。	
						後藤 (1960)	『源氏物語』において、「いとほし」は、対象と自己との間に強いつながりを感じて、何とかしてやらねばいられない気持ちを表す。ほとんどの例が、「かわいそうだ」「気の毒だ」「不憫だ」のような意味だが、「かわいらしい」「可憐だ」の意味の例もある。「困る」「迷惑だ」の意の例があるとするのは誤りである。
						山崎 (1970)	A 心情表現として用いられる場合：(1)行為主体が、自分の行為の影響を受ける相手に対して、自責の念をいだき、「申しわけない」とか「すまない」とかいうような心情を表すのに用いられる。(2)相手の行為が自分の思いの外であるとき、それに対して、「くやしく、心外に思う」心の表現に用いられる。(3)「人目」または「人聞き」に対して、「 <u>体裁が悪い</u> 」とか、「 <u>みづともない</u> 」「 <u>見苦しい</u> 」とかいうような意を表すのに用いられる。 B 他者の属性または情態についての表現に用いられ、「 <u>愛憐</u> 」ないし「 <u>憐憫</u> 」の情を起こさせるようなさまを表すのに用いられる。
						関 (1971)	「いやだ」「いとしい」「気の毒だ」の意がある。「いやだ」の意が多い。
						小原 (1979)	すでに一定の段階（の悲しみ）に達している相手に、自分が苦痛・悲しみを与えることで、一段と辛い立場に置くことになり、そのとき自己に起こる感情に導かれて現れるのが「いとほし」である。同情・自責の念。必ず自分の言動が原因になる。結果、自責や後悔のように自己に対する気持ち

							と、同情・気の毒さ・申し訳なさという相手への気持ちの二義が現れてくる。
						陣野 (2011)	平安後期あたりまでの用例は、「自分にとっての困惑・つらい気持ちなどをあらわす。困る、いやだ」という語義で捉えられる。
(なし)	A	かなし	14	10			(1) 死、別離など、人の願いにそむくような事態に直面して心が強くいたむ。(2) 男女、親子などの間での切ない愛情を表す。身にしみていとおしい。かわいくてたまらない。(3) 関心や興味を深くそそられて、感慨を催す。心にしみて感ずる。しみじみと心を打たれる。
						世羅 (2001)	既知の対象が人為の及ばない領域に移り、主体は、その欠落した対象との関係が二度と復旧しないため絶望し、諦念の情態にある、という心的状態を表す。
						滝口 (2012)	悲哀を表す「かなし」と愛情を表す「かなし」を区別することができる。
(感情)	A	ねたし	7	5			(1) 他人の充足した状態をうらやんで、反感の気持を抱く。うらやましくねたましい。また、ねたましく思われるほど、すばらしい。(2) 特に、男性に対して嫉妬の気持を抱く。(3) 自分の行為や選択が、思わしい結果を得られなくて、残念である。(4) 他人にうまうまとしてやられて残念だ。また、他人から見下げられてくやしい。
						石川 (1956)	自分の行為の失敗もあるが、他律的な酷い目にあわされたことに対し用いる。自責よりも、相手や外界に対して腹を立てることを表す。
						陳・吉田 (2007)	平安時代の文学作品に見られる「ねたし」の例は、「してやられた」といった、「相手の仕打ちや行為に対して、自分の負け(相手の優越)を悟った時の痛切な怒りに似た心的状態」と解釈される例が多い。自分の行為の失敗によって、自らの「負け」を悟った時の不愉快な感情をも表す。
(感情)	A	くろし	7	7			(1) 身体の状態や生活などが思わしくなく身に苦痛を感じている。(2) かなわない願いや悲しみ、後悔などで心が痛む。(3) 物事をするのがむずかしい。(4) 気を使ったり心を配ったりするさまである。
(評価)	A	かたはらい	5	7			(1) そばで見ていてもつらく思う。見ていて気ももめる。はたから見ていてはらはらする。(2) そばで見ていて苦々しく思う。はたから見ていて滑稽に感じる。笑止である。見てはられない。(3) そばの人に対して気がひける。人に笑われそうで恥づかしい。きまりが悪い。体裁が悪い。
						土屋 (2003)	「他人の行動を見て決まりが悪い」という自己への感情、「自分の行動を見られてきまりが悪い」という自己への感情、「他人の行動を見ていて苦々しい」という他人への評価、といった意味を表す。
(程度)	B	いみじ	21	31			善悪ともに、程度のはなはだしいことを表す。(1) (用言や体言を修飾して、その被修飾語の持つ属性の程度がなみなみでないことを表す) はなはだしい。(2) (望ましくないものについて、その程度がはなはだしい意を表す) ひどく…である。(イ) (話し手の情緒に好ましくない影響を与える場合) ひどくつらい、苦しい、みじめである、悲しい、情けない、恐ろしい、困ったことである、などの気持を表す。(ロ) (ある事柄がはげしくひどいさまにいう場合) ひどくはげしい、大変なことである、とんでもないことである、などの意を表す。(3) (望ましいものについてその程度がはなはだしい意を表す) ひどく…である。(イ) (話し手や周囲の者の感情・情緒に好ましい影響を与えた場合) たいそううれしい、喜ばしい、などの意を表す。(ロ) (ある事柄がすぐれている場合) たいそうすばらしい、りっぱである、情熱が深い、などの意を表す。
						御山 (1986)	1. 下に来る語句を修飾し、その程度がはなはだしいことを表す。2. 実質的に内容を表す語句が省略されていて、文脈からそれを補ってかんがえる。好ましくない状態を表す。3. 好ましい状態をあらわす。女流日記では1の例数が最も多く2の例も多い。3の例は少ない。
						森山茂 (1989)	程度のはなはだしいことを示す用法だけでなく、この語自体の意義を活かして用いられる場合もかなり存在している。これから起こることに対する悪い結果を予測して、悲嘆や嫌悪感や恐怖や不安や困惑を感じて、できればそれを「避けたい」もしくは「避けていたい」という気持ちを籠めて用いられている。心情を表す語句との関連で用いられることの方が数量的に多く、その場合には、暗く悲しい心情を表す用法が大半を占める。様態を表す語句と関連する用法では、数量的には少ないものの、明るく華やかな用紙や行動を表す場合に、様態そのものを表現する意味内容となる傾向がある。

(なし)	B	うらめし	5	8	相手の心や処置が期待に反するものであったり、望ましくない事態が自力ではどうにもならないような場合、それに対する不満、嘆きなどが心の内にわだかまっている。残念で悲しい。	
					熊谷 (1995, 1998)	多くは対人関係で用いられ、親密な関係になりたい維持したいという願いに裏打ちされた感情。その願いを阻む対象の行為等によって誘発される感情。しかし、対象に対する憎悪ではなく、自分の心でむすばれるものである。一般的に見れば、「ことわり」というべき、自然で正当性の認められる行為にも拘らず、わき起こる心情である。
(感情)	A	A	6	10	(1)情ない。つらい。心苦しい。 (2)いとわしい。面白くない。遺憾である。	
(感情)	A	くちをし	7	23	〔一〕思う事ができなかつたり、思うようにいかなかつたり、または、大切なものを失つたりして、失望、落胆した気持を表す。〔二〕対象が、期待はずれ、不十分で、満足できないまでである。	
					石川 (1956)	心情を表現するものと、状態を表現するものと2つに別れる。そして、 <u>状態表現は、心情表現から派生した</u> 。そう考えられる理由：(一) <u>状態表現は、用例数が心情表現より少ない</u> 。対象は、世・身分・運命・境遇などに限定される。(二) <u>心情表現から状態表現への推移は、その逆よりも説明しやす</u> い。(三) 時代が下った徒然草などでは、 <u>状態表現の方が優勢</u> 。
					河辺 (1959)	心情を表現するものと、状態を表現するものと2つに別れる。(心情)：事・志に反した、期待に背いた、あてがはずれた、などの状況で使われる。失望・落胆。がっかりした、残念な、悔しい。(状態)：期待の持ちようがない、失望しか味わえないような、誰が見てもがっかりするような、という客観的状态。
田中 (2010)	〔一〕大切な人と別れたり、一緒にになりたい人と一緒になれなかつたりしたときに感じる気持ちを表す。 〔二〕他の人と比べられたり、他の人に本性を見られたり聞かれたりするときに感じる気持ちを表す。 〔三〕人の価値を損なう出来事や、人の価値を損なう性質に触れたときに感じる気持ちを表す。また、そうした出来事や性質も表す。 ①人の価値を損なう出来事や性質に触れたときに感じる気持ち。 ②取るに足りない無価値である人の性質。人の価値を損なう出来事や性質、またその状況や場の評価。 〔一〕〔二〕と〔三〕の①は情意、〔三〕の②は属性・評価である。					
(なし)	C	むきむき	2	8	(1)これで終わりという限度がない。尽きたり、終わつたりすることがない。(2)物事の状態の程度が著しい。(3)それ以上に上のものがない。	
(なし)	A	こひし	2	9	(1)離れたところにある事物や人が慕わしくてじっとしてられない気持である。(2)特に、男女間で、慕いこがれる気持にいう。 世羅 (2001) 元々存在していた既知の対象の欠落に主体自身関与していることから、主体はジレンマに陥り、葛藤している、という心的状態を表す。	
(なし)	A	こころぐるし	3	18	(1)心に苦痛を感じる。胸が痛い。(2)人の身の上を思つて <u>気遣わしい</u> 。気の毒である。いたわしい。(3)相手にすまない気持がする。気がとがめる。	
					山崎 (1970)	人間の情態や有様について用いられるときは、「いたいたい」とか「いたわしい」の意。事柄について用いられるときは、「心にかかる」とか「気にかかる」の意。しばしば「心配だ」の意。
尾崎 (1972)	「心が苦しい」という、主体の気持ちを表す用法は恐らく本来的のものである。そこから、そうした感情を起こさせる対象の属性をも表現するものが派生する。「可憐だ、いじらしい」の意味になるのは自然であり、「可愛らしい」の意味にもなる。また、「こちらが心苦しくなるほど身分が高い、高貴だ」という意で解される例も見られる。					
(評価)	A	ゆかし	2	13	それに心がひかれ、実際に自分で接してみたいという気持を表す。	
					世羅 (2001)	主体が、他者から受けた要因により、対象が欠如していることにはじめて気づかされ、欠如している未知の対象に期待を抱いている、という心的状態を表す。
					土屋 (2002)	枕草子では、「魅力的だ」とか「美しい」とかいう意味では用いられない傾向にある。美的評価や、「快」を示す感情語でもない。具体的に、知りたい、

					見たい、聞きたいという願望を表す要素が強い。	
(なし)	(なし)	く が た し			動詞の連用形に付いて、その動作の実現が困難であることを表す。	
					進藤 (1977)	『源氏物語』においては、別離や忍耐の苦悩の感情が伴いやすい語義を有する動詞に接合したものが大部分を占める。
					林田 (1996)	動作の実現が極めて困難であることを表す。不可能表現に近い。
					漆谷 (1997)	精神的に不可能な場合にも能力的に不可能な場合に用いられる。
					館谷 (2000)	ガタシは、上接動詞が表す動作・行為の実現を望む、望まないに関わらず、動作・行為を表現すること自体が極めて不可能に近いことを表す。

さて、図表 10 でまず分かるのは、ほとんどの形容詞が吉田(1995b)の類型ではAに該当し、また安本(2009)の分類ではAに該当するという点である。すなわち、表中に示した形容詞の大半は、意味的には評価・感情を表すものであり、構文的な振る舞いも共通するものということになる。終止形型と相性の良い形容詞や、連用形型と相性の良い形容詞が存在することの事情は、意味類型や、構文的性格に基づく分類から説明することはできないことが分かる。そこで、個々の語が持つ語彙の意味を詳細に見ることにした。

図表 10 の右列に示した意味・用法の詳細を見ると、形容詞の多くは複数の意味を表しうることが知られる。中でも特に、表現主体が捉えた対象の状態を意味する用法と、表現主体自身の情意のあり方を示す用法とは、大きく意味のあり方が異なっており、諸先行研究でもこれら 2 用法の区別が重視されている。図表中では、表現主体が捉えた対象のあり方についての記述に波下線を付し、表現主体自身の情意のあり方についての記述に一重下線を付したが、全体的傾向として、終止形型での使用が優勢になるほど、波下線を付した意味合いを持つものが目立ち、連用形型での使用が優勢になるほど、一重下線を付した意味合いを持つものが目立つだろう。文献上の用例数の状況に基づく記述(二重下線部)も、終止形型での使用が優勢な形容詞は、表現主体が捉えた対象の状態を意味する用法が本来的であり、連用形型での使用が優勢な形容詞は、表現主体自身の情意のあり方を意味する用法が本来的であることを示す傾向にある。「くちをし」を例にとると、終止形型で用いられた例が 7 例であるのに対し連用形型で用いられた例が 23 例であるから、連用形型の方が優勢であると判定でき、またこのことは、石川(1956)が示す「くちをし」の一般的な使用傾向、すなわち表現主体の心情を表す用法の方が事物の状態を表現する用法より例数が多いことも整合する。

掻い摘んで言うならば、終止形型で用いられやすい形容詞は、「思ふ」の主体が捉えた事物がいかなる状態にあるかを示すものであり、連用形型で用いられやすい形容詞は、

³⁶ 安本(2009)では接尾辞ではない自立語の「かたし」と、接尾辞の「がたし」を伴う「ありがたし」「すてがたし」が掲出されるが、他の「動詞連用形+がたし」は分類の中に入っていない。「ありがたし」「すてがたし」は、単純に動詞+接尾辞という構成であることから説明の付かない意味も派生している可能性があり、その点を考慮して他の「動詞連用形+がたし」と区別したものと推察される。

「思ふ」の主体の情意・評価のあり方を示すものである、という傾向を指摘できよう。次の例を見たい。

- (98)a. 女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで、おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ。(落窪・一・64)
- b. 惟光やうの人は、心の中に神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。(源氏・濤標・2-305)
- c. 乳母、人げの例ならぬをあやしと思ひて、あなたなる屏風を押し開けて来たり。(源氏・東屋・6-61)

(98)は終止形型の例であり、終止型での使用が優勢な「つらし」「めでたし」「あやし」が用いられている。下線部の形容詞は、ヲ格成分の表す事物の状態を意味するもの解されよう。すなわち、形容詞型は「思ふ」の主体がヲ格成分の表す事物がいかなる状況にあるかを把握する意を表す構文として理解するのが妥当だろう。続いて次の例を見たい。

- (99)a. 大臣は御返りをいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず。(源氏・総合・2-372)
- b. 「一品宮はやがて院におはしますべく」など申させ給ふにも、齋院の御事をぞ又心苦しうおぼしめしける。(栄花・三十三・下-393)
- c. 内には「人見る折」といふやうに、今めかしう、何事につけても中宮を常に恋しう思ひきこえさせ給へり。(栄花・四・上-155)

(99)は連用形型の例であり、連用形型での使用が優勢な「ゆかし」「こころぐるし」「こひし」が用いられている。下線部の形容詞は、ヲ格成分の表す事物の状態よりも、「思ふ」の主体の情意の在り方を表すことに重点があると解されよう。(99a)では主体である「大臣」が、「御返り」に対して「ゆかし(見たい)」という情意を抱いているのであり、「御返り」が「ゆかし」という状態にあることを「大臣」が把握する、という意では解しがたい。(99a, b)もやはり同様に解釈され、それぞれ「齋院のことで苦痛を感じる」「中宮が恋しい」という、「思ふ」の主体の情意を読み取るべきであろう。すなわち連用形型は、ヲ格成分の表す事物に関して「思ふ」の主体が何らかの感情を脳中に生じる意を表す構文として理解するのが妥当だろう。

終止形型と連用形型とでどちらが優勢とも言えない形容詞についても、基本的には、終止形型の方ではヲ格成分の表す事物の状態と読むべきで、連用形型の方では「思ふ」の主体の情意を表すと読むべきではないかと思われる。

- (100)a. ことなる事なきは[=これといったところのない子供は]また、これ[=子供]をかなしと思ふらむは、親なればぞかしとあはれなり。(枕・二四九・380)
- b. 小侍従はいつか亡せはべりにけん。その昔の若ざかりと見はべりし人は、数少なくなりはべりにける末の世に、多くの人に後るる命を、悲しく思

ひたまへてこそ、さすがにめぐらひはべれ [=それでも俗世に生き続けているのです]。(源氏・橋姫・5-162)

(101)a. 御息所、安げなき世のむつかしさに、里がちになりたまひにけり。尚侍の君、思ひしやうにはあらぬ御ありさまを口惜しと思す。

(源氏・竹河・5-107)

b. 姫宮の十二三ばかりにていとうつくうおはしますを、明暮見奉らぬ事を口惜しうおぼしめしたり。(栄花・十・上-337)

(100a)の「かなし」は子供が「かわいい」ことを表し、(100b)の「かなしく」は「思ふ」の主体が抱く悲哀を表すと読むと文意がよく通る。また、(101a)の「くちをし」は、思い通りにならない娘(御息所)の状態が「期待はずれである」ことを表し、(101b)の「くちをしう」は、美しい姫宮を見ることができないことについて「思ふ」主体が落胆する気持ちを表すと読むのが妥当だろう。

なお、形容詞型接尾辞「～がたし」は、林田(1996)や舘谷(2000)などでは“事態の実現が困難である”という、表現主体の情意とは関係が希薄な意味合いが認定されているが、連用形型での使用が優勢である。これは、これまでの本稿の主張と合致しない事実のように見えるが、用例を確認すると、むしろ「思ふ」の主体による強い情意の存在が読み取れる。

(102)a. かくてさぶらふこれかれも、年ごろだに、何の頼もしげある木の本の隠ろへもはべらざりき。身を棄てがたく思ふかぎりほどほどにつけてまかで散り、昔の古き筋なる人も、多く見たてまつり棄てたるあたりに、…

(源氏・総角・5-228)

b. …丑の時ばかりに、御船より下りさせ給て上らせ給へば、都には暁方におはしまし着かせ給へば、人の家どもにおどろきて、はじめの名残を日頃忘れ難く思ひければ、門あけ騒ぎ見し暁の朝顔、夜の衣などかへざまなどにてやがてある人などありしこそおかしかりしか。(栄花・三一・下-355)

c. …、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひてかき撫でつつ、うち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ率て行かるる心地、いとあかずわりなし。(更級・282)

(102a)の「捨てがたく」は、自分自身を棄てることへの精神的葛藤、(102b)の「忘れ難く」は、彰子の出立に対する名残惜しさ、(102c)の「見捨てがたく」も、泣く乳母を見捨てることについての申し訳なさという、「思ふ」の主体の情意が読み取れるだろう。

以上では、終止形型の形容詞はヲ格成分の表す事物の状態を意味し、連用形型の形容詞は「思ふ」の主体が抱く情意を表すと解すことによって、終止形型と連用形型における形容詞の使用傾向を捉えられることを述べたが、吉田(1995b)で述べられるように、

形容詞の持つ複数の意味は連続的である。終止形型と連用形型は類似した構文構造を持つものであり、本稿での調査・分析の結果からは、(本節冒頭で挙げた諸先行研究のような、両者を同義と見なし書き換え可能とする分析はできないにしても) 意味の次元での截然とした使い分けがなされていたとは考えられない。次の例は、以上に見たような傾向とは合致しないものである。

(103)a. [宮が女君に] ものなどのたまふさまを [源氏は] ゆかしと思すなるべし。

(源氏・螢・3-197)

b. まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家にながむる心細きなれば、深うも思ひたどらず、この御あたり [=源氏] のことをひとへにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。

(源氏・澤標・2-287)

(103a)の「ゆかし」は、終止形型で用いられているが、連用形型での使用が優勢な形容詞であり「思ふ」の主体が抱く情意を表すと読むべきだろう。(103b)の「めでたし」は、連用形型で用いられているが、終止形型での使用が優勢な形容詞でありヲ格成分の表す事物の状態を意味すると読むべきだろう。このような例が出ることも考慮し、終止形型はヲ格成分の表す事物がどのような状態になっているかを思惟する意の構文として用いられる傾向にあり、連用形型はヲ格成分の表す事態について何らかの感情を持つという意の構文として用いられる傾向にあるという、ゆるやかな捉え方を行うことが望ましいと言えよう。吉村(1994)では、終止形型よりも連用形型の方が「思ふ」が一人称主語で用いられやすいことが指摘されているが、「思ふ」の主体の情意・評価を直接知る人物は「思ふ」の主体本人であるために、そうした傾向が強くなるものと理解できるのではないだろうか。

4. 4 現代語との比較

本項では、BCCWJを用いて行った現代語の簡単な調査³⁷の結果と比較したい。次に示す図表11では、終止形型と連用形型の両方で得られた形容詞語彙の例数を示し、図表12では終止形型と連用形型とで一方のみで得られた形容詞語彙の例数を示している。図表の構成は中古語の検討の際に参照した図表7・8と同様である。

³⁷ コーパス検索アプリケーション「中納言」により、サブコーパス「出版」(書籍・新聞・雑誌)の非コアデータを対象に次の共起条件を指定して検索を行った。

終止形型：語形―「ヲ」、品詞―大分類―形容詞、語形―「ト」、語彙素「思う」

連用形型：語形―「ヲ」、品詞―大分類―形容詞、語彙素「思う」

	終止 形型	連用 形型	合計	終止形型 連用形型
羨ましい	9	3	12	3.00
好ましい	5	2	7	2.50
恥ずかしい	5	2	7	2.50
有り難い	10	4	14	2.50
面白	7	3	10	2.33
楽しい	1	1	2	1.00
可笑しい	1	2	3	0.50
良	1	2	3	0.50
延べ語数	39	19	58	
異なり語数		8		

終止形型			連用形型									
欲	し	い	9	嫌	し	い	16	愛	し	い	1	
怪	し	い	4	快	い	11	煙	た	い	1		
美	し	い	4	誇	ら	しい	7	喜	ば	しい	1	
可	愛	い	3	い	と	お	しい	6	忌	ま	ましい	1
馬鹿	馬鹿	しい	3	悪	い	6	強				1	
怖		い	3	恨	め	しい	6	齒	痒	い	1	
素	嗜	らしい	2	恋	し	い	5	辛			1	
可	愛	らしい	1	悔	し	い	4	憎			1	
苦	し	い	1	懐	か	しい	4	憎	々	しい	1	
嫌	ら	しい	1	苦	々	しい	4	妬	ま	しい	1	
高		い	1	も	ど	かしい	3	煩	わ	しい	1	
醜		い	1	疎	ま	しい	3	悲	し	しい	1	
正	し	い	1	寂	し	い	2	腹	立	たしい	1	
憎	ら	しい	1	情	け	ない	2	慕	わ	しい	1	
煩		い	1	鬱	陶	しい	2	頼	も	しい	1	
優	し	い	1									
延べ語数			37					延べ語数			96	
異なり語数			16					異なり語数			30	

図表11・12に示される現代語の状況は、中古語の状況(図表7・8)と大きく変わることは無い³⁸。終止形型では事物の状態を言い表す形容詞が多く、連用形型では表現主体の情意を意味する形容詞が多い。名詞型(ト型・ニ型)は、中古語と現代語とで相違する面が大きかったのに対し、形容詞型(終止形型・連用形型)は中古語と現代語とを同様に捉えることが可能なようであり、通時変化が乏しかったものと想定される。

5 語順の問題

現代語の認識動詞構文は「～を 内容補充分 思う」の語順で固定しており、「内容補充分 ～を 思う」という語順は許容されないことが指摘されている³⁹(Kuno1976: 35、阿部忍 1991:24、福田 1997:25-26、日本語記述文法研究会編 2009:163、阿部二郎 2011:18、金賢娥 2011:70 など)。

(104)a. ヤマダはタナカを馬鹿だと思っていた。

(Kuno1971:24の(17b)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

b. *ヤマダは馬鹿だとタナカを思っていた。

(Kuno1971:35の(66)、原文を仮名・漢字表記に改め、下線を付した)

同様の事実は次のような変化動詞文においても指摘することができる。

(105)a. サムエルはサウルの頭に油を注ぎ、彼を王とした。

(BCCWJ/小坂井澄『ユダヤ人復讐の行動原理』)

b. まともな人間を「修羅」に変えてしまう。

³⁸ 中古語に比べ、終止形型と連用形型の両方で用いられる形容詞の種類が少ないように見えるが、調査の結果得られた例数が中古語より少ないことによるかと思われる。

³⁹ Kuno(1976)は(104a,b)について、「I do not understand what prevents the application of the scrambling rule to (17b) to produce (66).」とし、掻き交ぜが不可能であることの理由については保留している。

(106)a. *サムエルはサウルの頭に油を注ぎ、王と彼をした。

b. ?「修羅」にまともな人間を変えてしまう。

2節・3節で見たように、中古語の認識動詞構文(の名詞型)はト型とニ型が用いられ、変化動詞文「～を ～と／に する／変える」と同様に「～を ～と／に 思ふ」という文型として記述できる⁴⁰。認識動詞構文における語順の制限は、(105)(106)のような変化動詞文と類似する性格を示すものではないだろうか。名詞型の認識動詞構文における助詞ト・ニをコピュラと考える見方はこうした点からも指示されよう。

さて、現代語において以上のような語順の制限がしばしば指摘されてきたのに対し、中古語に関しては「内容補充分 ～を 思ふ」となっているように見える例の存在が指摘されている(小田 2015:374-375)。以下に、調査によって得られた全例を示し、検討を加えたい。

まず、次に示す例は、「世(の中)を思ふ」「ものを思ふ」という連語的な形が用いられるものである。

(107)a. …つつましものを思ひつるに、気ののぼりぬるにや…

(源氏・若菜下・4-281)

b. …あさましのみ世を思へる気色なり。

(源氏・須磨・2-170)

c. …いみじとのみ物を**おぼ**したるがいとあはれになん。

(栄花・十三・上-410)

(108)a. …いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくまに、

(源氏・玉鬘・3-102)

b. …身の思はずになりそめしより、いみじうものののみ思はせてまつることと生けるかひなく思ひつづけたまひて…

(源氏・夕霧・4-422)

c. 思ひやる方なくてただ騒ぎあへるを、かの心知れるどちなん、いみじくものを思ひたまへりしさまを思ひ出づるに、身を投げたまへるかとは思ひ寄りける。

(源氏・蜻蛉・6-201)

d. 人の上にて、あいなくものを思すめりしころの空ぞかしと思ひたまへ出づるに、いつとはべらぬ中にも、…

(源氏・宿木・5-454)

e. …、仏、聖も罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し…

(源氏・蓬生・2-335)

f. かからぬ御有様にて、待ちつけたてまつり給へると思はましかば」と、常

⁴⁰ ただし、変化動詞文では「～と」「～に」が着点格としての性質を持っていると考えられ、起点格の「～から」が共起しうる。このようなことは、認識動詞構文では起こらない。この点で、変化動詞文と認識動詞構文は異なる構造を持つが、近い性格のものとして位置付けることは可能だろう。

(i) カメレオンが、体色を木の色から葉の色に変えた。

(ii) *私は息子を誇りから重荷に思った。

よりもいみじう物を思ふに、いとどかくの給はすれば、…

(浜松・二・219)

g. (和歌) 初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

(伊勢・四九・156)

(109) 大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなんと深く思ほすべかめる。

(源氏・絵合・2-392)

(107)は形容詞型において、(108)は連用形型において、(109)は二型において、ヲ格成分と内容補充成分の語順が入れ替わったように見える。ただし、「ものを思ふ」「世(の中)を思ふ」という連語は次のように内容補充成分を伴わない形でも用いられる。

(110) …、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど、なほこの領じたりける物の身に離れぬ心地なんする、このあしき物の妨げをのがれて、後の世を思はんなど、悲しげにのたまふことどものはべりしかば、…。

(源氏・夢浮橋・6-377)

(111) 出でたまふほどを、人々のぞきて見たてまつる。入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎、狼だに泣きぬべし。

(源氏・須磨・2-169)

認識動詞構文においては、内容補充成分が必須の要素であって欠くことはできない。

(112)a. 遭難者は、救援部隊の出動をありがたいと思った。

b. 遭難者は、救援部隊の出動をありがたく思った。

c. *遭難者は、救援部隊の出動をφ思った。

(112a, b)のように「ありがたい」「ありがたく」という内容補充成分が共起するものは適格だが、(112c)のように内容補充成分を欠くと不適格になる。(110)(111)の「世を思ふ」「ものを思ふ」は、内容補充成分を欠いており認識動詞構文とは異なる構造を持つと考えるべきだろう。

(107)(108)(109)に示す諸例は、(110)(111)のように認識動詞構文とは異なる構造を持つ「世(の中)を思ふ」「ものを思ふ」に、付加的に「～と」「～に」や形容詞連用形などの内容補充成分が共起したものと了解すべきであろう。少なくとも、「世を思ふ」「ものを思ふ」という形が連語として持つ意味的・文法的性格を考慮すべきであり、これらの例をもって中古語の認識動詞構文は語順の制約が無かったと考えることはできない。

次に、「世を」「ものを」以外のヲ格成分を取る例について検討したい。

(113)a. 衛門、かくしたまふを、思ふやうにめでたしと、男君を思ふ。

(落窪・三・230)

b. 帝は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。

(源氏・竹河・5-104)

(113)は、「～と 〈人物〉を 思ふ」という形であり、形容詞型においてヲ格成分と内容補充成分「～と」の語順が入れ替わったように見えるが、これらも、「～と」が付加的に付いたものと了解できる。次のように内容補充成分を伴わない「〈人物〉を思ふ」の例があることを確認したい。

(114)a. 尚侍の君は、つとさぶらひたまひて、いみじく思し入りたるを、こしらへかねたまひて、「子を思ふ道は限りありけり。かく思ひしみたまへる別れのたへがたくもあるかな」とて、御心乱れぬべけれど、あながちに御脇息にかかりたまひて、… (源氏・若菜上・4-44)

b. 春宮の女御の御ありさまのならびなく、齋きたてたまへるかひがひしきも、大将のまたいと人にことなる御さまをも、いづれとなくめやすしと思すに、なほこの冷泉院を思ひきこえたまふ御心ざしはずぐれて深く、あはれにぞおぼえたまふ。 (源氏・鈴虫・4-390)

現代語にもほぼ同様の表現があり、(113)は(115)に、(114)は(116)に近いものと言えよう。

(115) 「彼をなんとか昇格させたい」と部下を思うあまり、「よく見てあげたい」という気持ちが働いたり、「厳しく評価したら部下に悪感情を持たれるのでは」という気持ちが寛大化傾向を生じさせます。
(BCCWJ/金津健治『人事考課の実際』)

(116) 好きで注意しているわけではないのです。部下を思って嫌われるのを覚悟でいる彼の気持ちも分かってあげないとね。 (BCCWJ/Yahoo!知恵袋)

(113)～(116)の「思ふ(思う)」は、思慕や思い入れといった意味合いがあり、「～と」は任意成分として付加的に共起するに過ぎない。ならば、やはり認識動詞構文とは別の構造を持つものと考えるべきだろう。

最後に残りの例を次に示す⁴¹。

⁴¹ 以下は、本文に問題がある可能性を考慮すべき例であり、考察対象から除きたい。

(i) さまざまに思しかまへけるを色にも出だしたまはざりけるよと、疎ましくつらく姉宮をば思ひきこえたまひて、目も見あはせせてまつりたまはず。 (源氏・総角・5-269)

(ii) 残り少なき齡のほどにて、御ありさまを見はつまじきことと、命をこそ思ひつれ。 (源氏・乙女・3-54)

(iii) [中將は] 飛鳥井 [= 催馬楽の一つ] すこしうたひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の何とも世を思さでものしたまふ悲しさを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」など語りたまふに、たへがたく思したり。 (源氏・須磨・2-214)

(iv) かの殿は、猶いと恥しう人目をおぼしたれど… (栄花・十四・上-419)

(i)は、『源氏物語大成』(第五冊、p. 1620)によれば「疎ましくつらく」の部分に「うとましくつらくて」(平瀬本)という異文があるとされる。また、「つらく」の無い「うとましく」(大島雅太郎氏蔵河内本・横山本)という異文もあり、やや本文に問題がある部分かと思われる。(ii)は、『源氏物語大成』(第三冊、p. 692)によれば「命を」の部分に、「いのちをしよう」(河内本系)という異文があるとされる。(iii)は、『源氏物語大成』(第二冊、p. 433)によれば、「何とも世を」の部分に「なにことも」(御物本)という異文があるとされる。(iv)は、『栄花物語の研究』(校異篇・中巻、p. 242)によれば、「人目をおぼし

(117) 亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる
(源氏・手習・6-341)

(118)a. かかる程に、大殿 [=道長] はすけかたの君の家におはしますに、いみじう悩ませ給ふ。[世間の人々は] ただ今の大事にこれ [=道長が病気であること] を思ふ。
(栄花・七・上-220)

b. 東宮ただ今は、人知れずまめやかにやん事なき方には宣耀殿をおぼしたり。いたはしう煩しき方には淑景舎を思ひきこえさせ給へれば、わざとも麗景殿まではさしもおぼしたらず。
(栄花・四・上-140)

c. さりととも御心の中の歎かしう安からぬ事には、これをこそおぼしめすらんに、いみじう心苦しういとをしう。
(栄花・九・上-303)

これらは、二型で語順の転倒が起きたものと理解される。(117)に関しては、次の(119)(120)にも見られる「人をも身をも」「身をも人をも」のような形が、コロケーションをなしていた可能性は考慮すべきだろう。和歌の音数律によって七音の位置に現れることが優先され、自然な語順とならなかったものと捉える余地はある。

(119) (和歌) あふ事のたえてしなくは中々に人をも身をも怨みざらまし
(拾遺・678)

(120) 身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なるときはうらみず。
(徒然草・二一一・260)

(118a, b, c)は『栄花物語』(正編)のものであり、同一著者(赤染衛門か)の個人文体によるところがあるかもしれない。(117)(118a, b, c)を、語順が転倒した例と認めるにしても、そうした例の出現頻度は低いという点には注意して良い。先行研究の多くは、ヲ格成分と内容補充成分の語順が入れ替わる例を完全に不適合なものとして扱っているが、実例を見る限りでは、語順の転倒したものが得られないわけではない。

(121) ついに路上で倒れ、そのまま意識がうすればじめたとき、あたまのどこかで、(無残だ)と、われながらわが身をおもった。

(BCCWJ/司馬遼太郎『歳月』)

認識動詞構文の語順は、かなり固定的であるとはいっても、稀に転倒した例が現れることはある。中古語において得られた(117)(118a, b, c)のような例もそうした例の一環として捉えられるのではなからうか。ならば、中古語においても、現代語と同様に「～を 内容補充成分 思ふ」という語順が原則であることを認めることができるだろう。

たれど」の部分に、格助詞ヲの無い「人めおほしたれと」(西本願寺本)という異文があるとされる。

6 まとめ

本節では、本稿での分析結果をまとめる。

まず名詞型（ト型・ニ型）に関しては、特に現代語との比較を通して中古語の状況を概観した。

「～を 名詞と 思ふ」（ト型）は、現代語ではダを挿入した「～を 名詞だと 思う」の形が標準的となっているが、中古語ではそれに相当する現象（「なり」の挿入）が無い。現代語において「人を人と思わない」と「人を人だと思わない」とを比較すると、後者の「人だと」は語彙的意味の通りの「生物としてのヒトだと」という解釈になるが、前者の「人と」は語彙的意味に従う解釈の外に、前後文脈によって語用論的意味で解釈される場合も多い。語彙的意味での解釈を優先させる手段としてダの挿入という形式的な操作が存在する現代語に比べると、中古語はそうした手段を持たない未分析なシステムだったことになる。なお、現代語において「～を名詞だったと思う」「～を名詞{にちがない／かもしれない／だなあ}と思う」のようにテンス形式・モダリティ表現が生起すると容認度が落ちるようであり、ダの挿入によって述語的な性格が与えられるという見方は正しくない可能性がある。もし「～を 名詞だと 思う」という表現において「名詞だ」の部分に述語的な性格を持たないのだとすれば、“名詞だ”という述語成分に対応する主語が必要であり、その主語に相当する成分が文中では例外的にガ格ではなくヲ格で現れている”（例外適格付与）という見方を取る必要もないし、ダの挿入に当たる現象が起こらない中古語のト型を、現代語の「～を 名詞だと 思う」に相当する表現として理解することも可能である。

「～を 名詞に 思ふ」（ニ型）は、現代語では使用できる名詞の種類が少ないのに対し、中古語では「情意・評価を表す形容詞+こと／もの」のように形容詞と形式名詞によって作られる名詞句をはじめとして種々の名詞が用いられる。ただし、「名詞に」が「思ふ」の主体が持つ個人的な情意・評価を示すものとなる点は、現代語と中古語とで共通している。中古語のト型では指示的名詞句や不定語をトで受ける例も少なからず見られたが、ニ型の場合にはその種の名詞をニで受ける例が無い。このことも、ニ型のニが「思ふ」の主体の個人的な情意・評価を示す名詞しか受けないという性質を持つことによるものとして説明することができる。

次に、形容詞型については、終止形型と連用形型を比較しながら考察した。終止形型は、ヲ格成分の表す事物の状態を意味する形容詞が用いられやすく、連用形型は「思ふ」の主体の情意を表す形容詞が用いられやすいという傾向が存在する。すなわち、終止形型は、主体がヲ格成分の表す事物がどのような状態になっているかを思惟する意の構文として用いられる傾向にあり、連用形型は、主体がヲ格成分の表す事態について何らかの感情を持つという意の構文として用いられる傾向にあると言える。この傾向は現代語

においても認められ、歴史的に一貫した使用傾向であることが想定される。

ヲ格成分と内容補充成分の語順に関しては、掻き交ぜができないとされる現代語に対し、中古語においては掻き交ぜが可能であることを示すように見える例が散見されるが、その多くは「世を思ふ」「ものを思ふ」の形で連語化したものなどであり、現代語と同様に語順の制約が存在することを認めることができる。

以上、本稿では、認識動詞構文を考察対象とするささやかな試みとして、中古語の例を調査し現代語と比較しながら分析を行った。下に示す図表13では、本稿の分析結果の概略を示してある。名詞型に関しては現代語と中古語とで相違が認められたが、ト型の内容補充成分がダの挿入によって述語形態を取るようになるのは、内容補充成分が述語形態を取る形容詞型（のうち終止形型）からの類推によるものかもしれない。また、ニ型が衰微したのは、使用できる名詞の種類に制限があることによる可能性はあるだろう。変化の要因を特定することは困難を伴うが、現段階では以上のように見通しをつけておきたい。また、ニ型と連用形型は、「思ふ」の主体が持つ情意を表す語が内容補充成分となる傾向にある点で共通している。ニ型の内容補充成分は、「思ふ」との意味的な関わりにおいて形容詞連用形に近い働きをすると考えることができるだろう（形容動詞連用形に近い性格を持つと見ることでもある）。

			中古語	現代語
名詞型	ト型	トは種々の名詞を受けることができる。現代語ではダの挿入が起こる。	と	だ と と 思う
	ニ型	ニは「思ふ(思う)」主体の情意・評価を意味する名詞を受ける。現代語では慣用的な表現に固定化。	～を 名詞 に	～を 名詞 (に)
形容詞型	終止形型	ヲ格成分の表す事物の状態を表す形容詞が用いられやすい。	～を 形容詞	終止形 と 思ふ 連用形 (思う)
	連用形型	「思ふ(思う)」の主体の情意を表す形容詞が用いられやすい。		

図表13：中古語と現代語の認識動詞構文

認識動詞構文に関して行われたこれまでの研究は、もっぱら現代語話者の内省判断に基づいて分析を行うものばかりであり、比較対象としては英語が選ばれることが多かった。これに対し本稿では中古語を考察対象とし、実例の状況から現代語との相違点・共通点を明らかにした。現代語が、通時的な繋がりの中で捉えられる中古語の状況と相違する面を持つという事実は、今後行われる現代語の分析に対しても一定の示唆を与えるのではないだろうか。古代語の引用表現については、現代語とは異なる現象がしばしば見出される。今後の研究において究明していきたい。

調査資料 (用例の引用に際し、句読点と括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換え、振仮名は一部を省略した。また、筆者による解釈や補足を[]によって示し、和歌は「(和歌)」という注記を入れた。出典を示さないものは筆者による作例である。)

○上代 続日本紀宣命：北川和秀編(1983)『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館 ○中古 古今和歌集・竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・更級日記：新編日本古典文学全集／蜻蛉日記・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語：日本古典文学大系 ○中世前期 徒然草：日本古典文学大系 ○中世後期 湯山聯句抄：来田隆編(1997)『湯山聯句抄 本文と総索引』清文堂／六物凶抄：寿岳章子・樺島忠夫・大塚光信編(1959)『六物凶抄並解説・索引』／中華若木詩抄：福島邦道編(1983)『中華若木詩抄〔寛永板〕』笠間書院／中興禅林風月集抄：大塚光信編(2000)『新抄物資料集成』清文堂／天草版平家物語：江口正弘(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇』明治書院／エソポのハプラス：大塚光信・来田隆編(1998)『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂／コリヤード懺悔録：大塚光信(1985)『コリヤード さんげろく私注』臨川書店／大蔵虎明本狂言集：池田廣司・北原保雄(1983)『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇』表現社 ○現代 曾野綾子『太郎物語』、島崎藤村『破戒』：『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』／梶井基次郎『檸檬』：『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』／国会会議録：国立国会図書館『国会会議録検索システム』(<http://kokkai.ndl.go.jp/>)／毎日新聞：『CD-毎日新聞』

※用例を検索するに際し次のものを用いた。

新編日本古典文学全集：国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(バージョン2015.3、<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)／日本古典文学大系：国文学研究資料館『大系本文データベース』(<https://base3.nijl.ac.jp/>)／BCCWJ(国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)：コーパス検索アプリケーション「中納言」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/BCCWJ-nt/search>)

引用文献

- 阿部忍(1991)「認識動詞構文の構造と格」『待兼山論叢 日本学篇』25 pp.17-31 (大阪大学文学部)
- 阿部忍(2001)「ことばと主観性—認識動詞構文再考—」『神戸山手女子短期大学紀要』44 pp.1-9
- 阿部二郎(2001)「「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」」『日本語と日本文学』33 pp.14-24 (筑波大学国語国文学会)
- 阿部二郎(2002)「認識動詞構文について」『日本語文法』2-1 pp.89-108
- 阿部二郎(2011)「「ノコト」の生じたECM構文について」『語学文学』49 pp.11-20 (北海道教育大学語学文学会)
- 池田義孝(1953)「『をかし』『あはれ』について」『愛媛国語国文』1 pp.8-10
- 石川徹(1956)「平安文学語意考証(その三) —おぼゆ・なつかし・くやし・ねたし・くちをし—」『平安文学研究』19 pp.42-56 (平安文学研究会)

- 漆谷広樹(1997)「平安時代和文における不可能性表現の位相について」加藤正信編『日本語の歴史地理
構造』明治書院 pp. 57-71
- 尾崎知光(1972)「「心苦し」の意味について—源氏物語の用例を検討して—」『愛知県立大学文学部論集』
23 pp. 29-38
- 小田勝(2015)『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
- 小原君恵(1979)「「いとほし」の沿革」『武庫川国文』16 pp. 40-54
- 川端善明(1958)「引用—上代語の場合—」『万葉』28 pp. 1-30
- 河辺名保子(1959)「「をし・あたらし」、「くやし・ねたし・くちをし・つたなし」、「あし・わろし」考」
『学習院大学国語国文学会誌』3 pp. 44-54
- 金賢娥(2011)「「AヲBトV」構文に関する一考察」『筑波応用言語学研究』18 pp. 63-77
- 金賢娥(2012)「「NP1ヲNP2トV」型の名詞句解釈と副詞共起制限」『筑波応用言語学研究』19 pp. 47-5
9
- 金榮敏(2004)「主語繰り上げ構文における格付与の問題について」『日本学報』61-1 pp. 53-65 (韓国日
本学会)
- 金城克哉(2012)「コーパスに基づく引用句内のコピュラ(ダ)の顕在と潜在に関する研究」『琉球大学
留学生センター紀要 留学生教育』9 pp. 21-33
- 熊谷由美子(1995)『源氏物語』における「うらめし」について『愛知大学国文学』35 pp. 29-39
- 熊谷由美子(1998)『源氏物語』における「つらし」「つれなし」「うらめし」の語義について『愛知大
学国文学』37 pp. 1-22
- 郡博子(1992)「日本語の語順を決める二つの要因—一定・不定とトピック・コメント—」『日本語・日本
文化』18 pp. 45-56 (大阪外国語大学留学生日本語教育センター)
- 後藤貞夫(1960)「源氏物語における「いとほし」の意義用法について」『国文学攷』23 pp. 35-43 (広島
大学国語国文学会)
- 三枝令子(2001)「ダが使われるとき」『一橋大学留学生センター紀要』4 pp. 3-17
- 坂井昌子(1987)「源氏物語」における感情形容詞の連用形の用法『岡山大学国語研究』1 pp. 56-69
- 佐藤定義(1988)『栄花物語の文法的研究』明治書院
- 重見一行(1990)「中古形容詞連用修飾の変相」『語文』55 pp. 9-16 (大阪大学国語国文学会)
- 進藤義治(1974)「「はづかし」の語誌」『南山短期大学紀要』2 pp. 25-41
- 進藤義治(1977)「王朝文芸文の「かたし」の接尾語的用法について」『アカデミア 文学語学編』24
pp. 25-45 (南山大学)
- 進藤義治(1978)「源氏物語の形容詞の連用形の機能について」『南山国文論集』3 pp. 7-24
- 陣野英則(2011)「源氏物語」の「いとほし」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』56 pp.
21-37
- 新村正人(2007)「コピュラの統語的特徴と普遍性」『南山言語科学』2 pp. 161-180
- 関宦市(1971)「「いとほし」の語義—主として「いとほし」を意味するものについて—」『国文鶴見』6

pp. 1-6

世羅恵巳(2001)「『源氏物語』における「かなし」など四語の心情形容詞について—心情主体者の状態に着目して—」『広島女子大國文』18 pp. 13-25

滝口美穂(2012)「古語「かなし」についての考察」『清心語文』14 pp. 29-40 (ノートルダム清心女子大学日本語日文学会)

武山隆昭(1981)「「めでたし」の語誌(上)—枕草子・源氏物語を中心に—」『椋山女学園大学研究論集』13-2 pp. 11-20

武山隆昭(1983)「「めでたし」の語誌(下)—平安後期文学を中心に—」『椋山女学園大学研究論集』14-2 pp. 1-12

館谷笑子(2000)「複合形容詞「一ガタシ」「一ニクシ」」『国語語彙史の研究』19 pp. 179-202

橘誠(1977)「源氏物語の語法・用語例—述語格の連用形の用法(一)—<「思ふ」系統の語の上位語を中心に>」浅野信博士古稀記念国語学論叢刊行会編『浅野信博士古稀記念 国語学論集』桜楓社 pp. 193-228

田中牧郎(2010)「中古語情意形容詞「くちをし」の意味記述—対象、誘因を表す語句の分析による—」月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点』武蔵野書院 pp. 317-337

田野村忠温(1995)「日本語研究の限界」『日本語学』14-4 pp. 80-88

田野村忠温(2008)「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」『待兼山論叢 文化動態論篇』42 p p. 55-76 (大阪大学大学院文学研究科)

陳崗・吉田則夫(2007)「心情形容詞の歴史的研究—「ねたし」について」『岡山大学教育学部研究集録』136 pp. 1-9

築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

辻本桜介(2015)「引用句の接続について」『日本語学論集』11 pp. 41-69 (東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室)

土屋博映(2002)「『枕草子』の「ゆかし」とその位置」『跡見学園女子大学短期大学部紀要』38 pp. 13-23

土屋博映(2003)「『枕草子』の「かたはらいたし」の位置」『跡見学園女子大学短期大学部紀要』39 pp. 1-12

坪本篤朗(2001)「認識動詞構文の形式と意味—文法と認知の接点—」中右実教授還暦記念論文編集委員会編『意味と形のインターフェース 上巻』くろしお出版 pp. 435-447

友田英津子(1978)「ダ削除変形について」『武蔵野英米文学』11 pp. 69-80

友田英津子(1994)「ダ削除変形と主観性」『淑徳短期大学研究紀要』臨時号 pp. 37-42

時枝誠記(1959)『古典解釈のための日本文法』至文堂(増訂版)

中島孝幸(1997)「引用節内の述語の形について」『甲南大学紀要 文学編』103 pp. 83-95

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房

日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版

蜂矢真郷(2001)「一音節語幹の形容詞」『万葉』178 pp. 1-14

- 林田昭子(1996)「「にくし」「かたし」に関する一考察」『山口国文』19 pp. 13-26
- 林登美子(1981)「日本語補文主語繰り上げに対する制限」『梅花短期大学研究紀要』30 pp. 37-48
- 福田稔(1997)「「こと」とECM構文」『帝塚山学院大学研究論集』32 pp. 20-29
- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院
- 細井富久子(1980)「「をかし」について—源氏物語を主として」『山脇学園短期大学紀要』18 pp. 1-27
- 益岡隆志(1984)「叙述性補足節と認識動詞構文」『日本語学』3-7 pp. 88-98
- 嶺岸玲子(2007)「引用文からみる文末表現ダの意味」『日本文学会誌』19 pp. 1-12 (盛岡大学日本文学会)
- 御山ひろみ(1986)『蜻蛉日記』における「いみじ」について『中世近世文学研究』19 pp. 26-30 (中世近世文学研究会)
- 村上幸江(1983)「源氏物語における「あやし」の研究」『九州大谷国文』12 pp. 52-56
- 森山茂(1989)『源氏物語』における「いみじ」の意義と用法—それを修飾する語句との関連において—『宇部国文研究』20 pp. 36-47 (宇部短期大学国語国文学会)
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎(1989)「自同表現をめぐって」『待兼山論叢 日本語篇』23 pp. 1-13 (大阪大学文学部)
- 安本真弓(2009)「構文的機能から見た中古形容詞の特徴—意味との関わりから—」『国語学研究』48 pp. 119-105 (東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会)
- 山崎良幸(1970)「「いとほし」と「心苦し」の意義について」『高知女子大國文』6 pp. 1-13
- 山田孝雄(1952)『平安朝文法史』宝文館出版
- 吉田光浩(1987)『栄花物語』における〈をかし〉—その使用数の語るもの—『和歌山工業高等専門学校研究紀要』22 pp. 137-140
- 吉田光浩(1995b)「平安期形容詞の意味と終止用法について—「枕草子」「源氏物語」「栄花物語」を資料として—」宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編『日本語の研究 宮地裕・敦子先生古稀記念論集』明治書院 pp. 112-145
- 吉村逸正(1987)「思考・発言の動詞に係る「あはれに」と「あはれと」」『国学院雑誌』88-1 pp. 93-109
- 吉村逸正(1994)「形容詞連用形思ふ」と「形容詞終止形と思ふ」『国語研究』57 pp. 25-44 (国学院大学国語研究会)
- 陸丹(2007)『「思う」認識動詞構文について—補文述語制約の観点からの一考察—』『筑波応用言語学研究』14 pp. 115-127
- 和田利政(1987)「形容詞の機能」山口明德編『国文法講座 第二巻』明治書院 pp. 139-164
- 渡辺茂(1986)「ネクサスの種類とその統語法的機能」『東京国際大学論叢 教養学部編』34 pp. 69-79
- Ohashi, Hideo(1984)“Control and Exceptional Case Marking in Japanese,”『中京大学文学部紀要』, 18-3/4, pp. 74-90.

- Ohtani, Akira(1998) "An HPSG Account of Japanese Raising-to-Object," 『言語文化研究』, 24 p. 107-127 (大阪大学大学院言語文化研究科) .
- Oshima, Shin(1979) "Conditions on Rules: anaphora in Japanese," 『言語学論考 井上和子教授に献げる論文集』, 研究社, pp.423-448.
- Kuno, Susumu(1976) "Subject Raising, " *Syntax and Semantics*, 5 pp.17-49.
- Horn, Stephen Wright (2012) 「日本語のいわゆる〈主語から目的語への繰り上げ構文〉」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版 pp.221-243
- Tomoda, Etsuko(1976-1977) "Raising and point of view : evidence from Japanese," *Papers in Japanese Linguistics*, 5 pp.361-376.

[付記]

本稿は、平成27年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：15J02304）による研究成果の一部である。

(つじもと おうすけ 大学院人文社会系研究科 博士課程2年)